

昭和四十一年度

財團  
法人

東洋文庫年報

東洋文庫

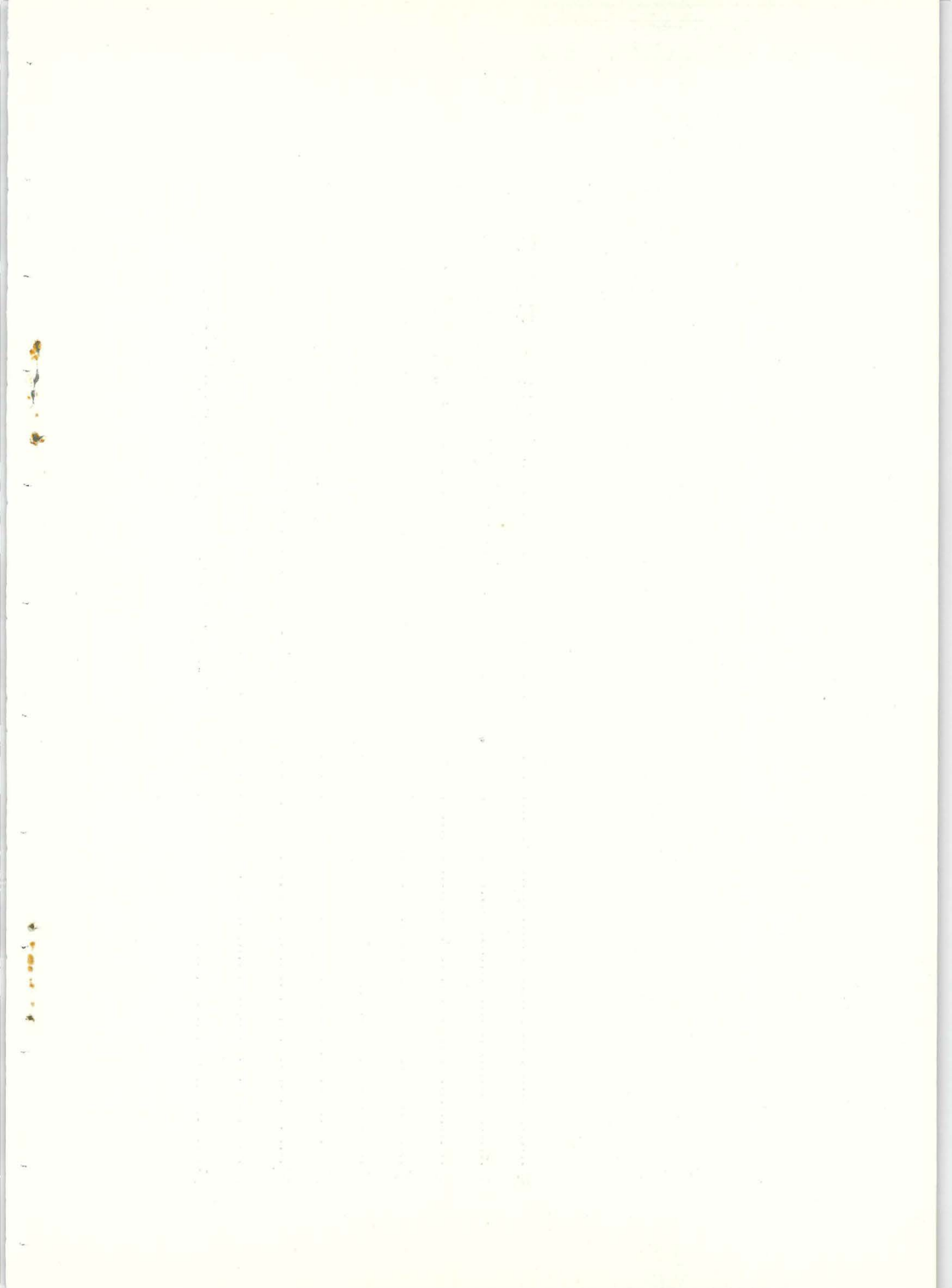
# 昭和四十一年度東洋文庫年報

## 目次

一	東洋学センターとしての東洋文庫	1
二	昭和四十一年度に於ける東洋文庫	3
三	多田等観先生の逝去	6
四	職員	14
五	事業	22
1	刊行図書	22
2	講演会(東洋学講座)	29
3	研究会(東洋文庫談話会)	64
4	展示会	65
5	情報連絡	66
6	図書の収集と閲覧	67
六	研究調査活動	73
1	東洋学連絡委員会	73

2	特定研究	74
3	機関研究	75
4	総合研究	76
5	各種研究委員会	78
	第一部 近代現代アジア研究	78
	近代中国研究委員会	78
	近代日本研究委員会	79
	第二部 東アジア研究	79
	東亜考古学研究室	79
	古代史研究会	80
	敦煌文献研究委員会	80
	宋史提要編纂協力委員会	80
	明代史研究委員会	81
	第三部 満蒙・朝鮮研究	81
	清代史研究委員会	81
	朝鮮研究委員会	83

第四部	中央アジア・イスラム・チベット研究	83
	中央アジア・イスラム研究委員会	83
	チベット研究委員会	84
第五部	南アジア・インド研究	87
	南方史研究委員会	87
6	研究者養成	87
7	職員の研究業績	88
附(一)	ユネスコ東アジア文化研究センター	103
(二)	東洋学術協会	116



## 一 東洋学センターとしての東洋文庫

東洋文庫は、大正六年（一九一七）、故岩崎久弥氏が中華民國總統府顧問ジョージ・アーネスト・モリソン氏の蔵書を購入して設けられた東洋学の専門研究図書館である。大正十三年（一九二四）十一月に現在地に財団法人として設立されてから今日まで、研究部・図書部・総務部を設け、(イ)アジア各地域の研究資料を網羅的に収集し、(ロ)東洋学の研究を推進すると共に全国の専門研究者に便宜を供与し、(ハ)各種の貴重な資料の複製を行い、重要な研究業績を出版し、(ニ)あわせて東洋学の普及事業と研究者の養成とに専念してきた。第二次大戦後の経済事情の変動に應ずるため昭和二十三年（一九四八）図書部は国立国会図書館支部として、その管理を受けることとなり、別に日本政府から民間学術研究機関補助金が、また外国からの援助金が寄せられて、研究部にはその事業と組織体制とを整えてきた。

東洋文庫の特色は、専門図書館としての文献資料センターの機能と、総合的研究機関としての研究センターの機能及び国内的国際的研究情報センターとしての自由な立場で運営されている点にある。東洋文庫は、(イ)一般研究者に対し収集資料を公開し、民間機関としての自由な立場で運営されている。(ロ)一大学、研究機関個々では系統的収集の困難な資料に重点を置いて収集している。(ハ)海外及び地方在住研究者に対しても、マイクロフィルム等による資料複写サービスを行い、収蔵する貴重資料を覆刻して逐次刊行し学界に提供している。(ニ)一大学、一研究所の枠を越えた総合的研究体制を取つて、各大学、研究機関に跨る流動的共同研究、国際的協力研究を行つている。(ホ)国内及び国際的研究情

報の交換、通信連絡の衝に当り、我が国の研究成果を広く海外に紹介している。(ノ)我が国東洋学の成果を広く一般に普及し、来日する海外のすぐれた東洋学者に講演を公開する場を提供し、また貴重な資料を展示する活動を行つてい  
る。(ハ)東洋学の特殊な専門分野の研究者を養成し、各大学の大学院博士課程修了程度の人材に引続き数年間の研究の  
機会を与え、特に比較的未開拓な分野の研究を促進せしめている。人文社会科学の振興が叫ばれ、その方策として総  
合的研究センター乃至専門文献センターの設置、整備が唱えられつつあるとき、従来からその方向を目指して活動し  
てきた東洋文庫には、一層内外の期待がかけられているのが実情である。

## 二 昭和四十一年度に於ける東洋文庫

昭和四十一年度の東洋文庫の一般事業は、文部省大学学術局を通じての日本政府からの、また東洋学研究会日本委員会を通してのハーヴァード・エンチン研究所の、及び東洋文庫維持会から、補助金並びに援助金を受けて行われた。その主要なものは次の通りである。

文部省の補助金による四十一年度の事業のうち、出版物は、中村拓著「鎖国前に南蛮人の作れる日本地図Ⅱ」（論叢四八）があり、講演会は「東洋学講座」を春秋二期、日本学士院会員原田淑人博士等十氏を講師として公開し、特別公演会を、京都大学名誉教授梅原末治氏を講師として二日に亘つて開き、研究会は五回行った。各研究室は、それぞれの研究課題に従つて、着々その成果を挙げてゐる。また十一月中旬には、十九世紀以前に我国と接触した欧米人の編著を通じて外国人が我々の言語を如何に観察し、いかに研究したか、その迹を歴史的に回顧しようという意図の下に、「東洋文庫所蔵欧米人の日本語研究書」の展示会を開催し、国立国会図書館の援助を得て解説目録を印行した。文部省の補助金を得て購入した図書、或は、交換受贈により収集した文献は、単行本Ⅱ和漢書二三一六点、洋書一三一二点、定期刊行物Ⅱ和書二〇三五点、洋書一四三一点に達した。収集図書については、「新着図書目録」等により速報する他、「東洋文庫洋書目録（定期刊行物）」、「漢籍分類目録集部」等を編集印行し、利用者の便に供している。文部省科学研究費補助金による特別事業は、特定研究「日本の近代化過程に対する国際的評価とその背景」が進め



られ、本年は第一年度として、資料の収集とその整理に当つた。機関研究「地方志にもとづく中国社会の研究」は、第二年度に入り、総合研究「金石文を主とした朝鮮史の基礎的研究」が開始された。

次代の中堅となるべき学徒を養成する研究生制度は、戦前より意を注いできたところであり、本年も、文部省及びハーヴァード・エンチン研究所の補助金により、五名の新進学徒が、研鑽に努め、着々その成果を挙げている。

当文庫は、海外研究機関との交流を盛んに行つており、外国人研究者を受け入れ便宜をはかる他、本年は六月三日から二十日にわたり、辻直四郎文庫長が渡欧し、フランス科学アカデミー創立三百年記念祝典及びブラッセル国際学術院第四回総会に出席した。また護雅夫研究員は、一九六五年日ソ両国政府間に成立した学者交換計画に基づき最初の交換学者三名のうちの一人として、一九六六年三月からほぼ二ヶ月のあいだ、ソ連に滞在し、主なる研究機関・大学で講義・討論・観察に従事した。訪問機関は左の如くである。

「レニングラード」ソ連科学アカデミーアジア諸民族研究所レニングラード支所、同言語学研究所レニングラード支所、同人類学・民族学研究所、エルミタージュ博物館研究部極東科、ソ連内諸民族博物館研究部、レニングラード大学東洋学部。「バクー(アゼルバイジャン共和国)」アゼルバイジャン共和国科学アカデミー言語・文学研究所、同東洋学研究所、バクー大学言語学部。「タシケント(ウズベク共和国)」ウズベク共和国科学アカデミー言語・文学研究所、同歴史学研究所、タシケント大学東洋学部。「モスクワ」ソ連科学アカデミーアジア諸民族研究所、モスクワ大学東洋語学院。

東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センターにおいては、「東アジア諸国における西洋文明の受容の歴史的背

景に関する国際協力調査」の最終年度に当るので、東京高輪プリンスホテルで、十月三日より七日まで、「東アジア諸国における西洋文明の受容に関する国際シンポジウム」を開催、外国人九名を含む二十四名の代表者が参加した。

昭和四十一年五月十一日、東洋文庫評議員として昭和九年以来、文庫の発展に尽力された日本学士院会員小泉信三氏が永眠された。また六月二十二日、文庫東洋学連絡委員会委員として、委員会発足当時より当文庫が斯界における諸役割を果たす上に、専門的見地から、協力、助言された仁井田陞博士が、逝去された。両氏の生前の文庫に対する御厚誼に厚く感謝すると共に深く哀悼の意を捧げる。四十二年二月十八日には、多田等観研究員が急逝された。氏は永年文庫のチベット研究室の中核として、終始その研究活動を指導された。東洋文庫が日本のチベット研究センターとしての実を挙げるに至ったのは、一に氏の尽力の賜であって、氏の本邦チベット学に尽された功績は、永く記念されるべきものであらう。哀惜の念に堪えない。

### 三 多田等觀先生の逝去

山口 瑞鳳

多田等觀先生が亡くなられた。今から考えて見ると、むしろ天寿を全うせられたと云つてよいのであるが、その当座は如何にも卒然と去られた感が深かった。二月八日、御病気で殞れる直前まで、実に壯者にかわらぬ御様子で私共に接して居られたのである。

先生の人柄は美辭麗句では綴られない破格な方に属していた。身近に接していた人々はよく御承知と思うが、好悪がはつきりしておられた。感情も時にはむき出しにして、取りつくしまも与えないという場合が決して珍らしくなかつた。いい方を変えると、童心を終生持ち続けたということになる。先生は何でもよく欲しがられた。そして、謎をかけて遠まわしに云つたり、はつきり、置いて行けなどということもあつた。云われたものは大抵先生のいうとおりになるのが普通だつた。ところが、何かを人にほめられると、それを「やろうか」などといつてあつさり呉れてやるのである。こうして面喰うような施しに与ることも、人によつてはあつた筈である。チベットの人は生をニヨン (shiyon) だといつて尊敬していた。ニヨンというのは常人ばなれのした聖のことである。チベットのニヨンと同じように、先生も日本の各地にかなり多数のフアナティックなどいつてもよいほどの渴仰者をもつておられた。これらの人々は上京しては先生と「お座敷」をもち、東洋文庫を訪れて叩頭して帰るのが常であつた。

確かに普通の年寄りにはない何か強く人をひくものがあつたようである。その幾分かは天性のもので、他の幾分か

は長い人生の行路のあいだに培かわれたものなのであろう。

前者に属する魅力が秋田から出て来たばかりの青年の先生に横溢していたに違いない。それが大谷光瑞師の目にとまり、その日から先生の一生は方角がきまつた。先生は明治二十三年、秋田市土崎港にある浄土真宗本願寺派の寺に生れ、同四十三年県立秋田中学を卒業せられると青雲の志を抱いて上洛しておられた。ちようどその頃ダライラマ十三世の使者テ・トゥル師が来日して光瑞師のもとに逗留していた。先生は使者の世話役を兼ねてチベット語の学習をするよう光瑞師から命ぜられたのである。本願寺飛雲閣で起居を共にしながら使者に秋田のズウズウ弁を教え、自分は立派なラッサ語を会得された。明治四十五年一月光瑞師から洋食の食べ方まで勉強させられて印度に帰える使者の伴を仰せつかつた。印度でダライ・ラマ十三世トゥプテン・ギャムツォに会い、ダライラマからその名の上半分をさずけられてトゥプテン・ゲンツェンと名乗ることになつた。ダライ・ラマもよほど先生が気に入つたのであろう。印度の亡命先から帰藏するに際して、先生のために特にラッサ語の教師を一人残して入藏の約束までさせたという。しかし、先生はまだチベットへ行く気にはなつておられなかつた。このことは自伝（稿本）の中で告白しておられる。ここでもよくわかるのであるが、あれ位の壮筆をなされたのだから、入藏の動機も立派なものに仕立て上げ、御自分の業績の意義をひきたたせようとされてもよさそうなのであるが、そういつた作意が微塵もなく、「成り行きさ、成り行きさ」と生前よく洩しておられたのが憶い出される。

そうこうしているうちに大谷光瑞師から入藏せよとの鶴の一声がかかつた。だが、事情は悪くなつていた。印度政庁が酷しい監視の目を光らせ始めていたのである。不思議なことに、そうなると先生の気持が変つた。是が非でも入

るのだと決心された。大正二年八月、官憲の目をあざむく為にカルカッタにひきかえし、ここで巡礼ラマ僧に扮してブータンに入られた。プナカ迄川をさかのぼり、ジヨモ・ハリの東の峠を越えてチベット国内に入り、ナカルツエに辿りついた。途中の御苦労は、勿論、並の人には耐えられないものだつたに違いない。チュシユルを通つて遂にラツサに著かれた先生はダライ・ラマの離宮ノルブ・リンカに早速迎えられた。これから十年のチベットの生活が始まつたのである。この前後に三人の日本人が入蔵した。だが、多田先生だけは終始特別の待遇を受けた。セラ寺のハルトン・カムツェンが日本人の寮と定められたのも、この時十三世が先生のために決めたのである。先生はポタラ宮とノルブ・リンカ離宮に自由に出入りすることを許され、カシヤ（内閣）の要人達、特に、有名な宰相ツァロン・シヤペと水魚の交を結んだ。十三世は五世以来の名君といわれ、チャールス・ベルなどもそれを認めている。この名君が外国人の先生にあらゆる特権を許したのであるから、先生の備えていた特別の魅力を高く評価しないわけにはいかないのである。先生は日本の新聞が伝えるニュースをチベット語に訳して十三世に呈出する仕事をダライ・ラマから課せられた。それで殆んど定期的に訳をもつてセラ寺からダライ・ラマの居間（*Gzins Khang*）に通われた。訪問を欠くと、不意の呼び出しに与かることも少くなかつたようである。

十三世は先生を決して表だつたところに出さなかつた。政治的な紛争の種になることを懸念してのことだつたらしい。十三世は当時イギリス側から色々な献上品を受け取ることが多かつた。ある時、献上品として大量な各種の罐詰を受けられたが、十三世自身は召し上がらないので全部先生に下さつた。しかし、一度に持ち帰ることを許されず、訪問毎に一個ずつ取るがよいという条件をつけられたということである。これが馬の鼻先に下げられた「人參」以上

に効果があつたものだと言つながら先生は當時を想い出されて楽しそうに大笑せられたものである。十三世は先生と話しながら治世上のアイディアを求め、肩のこる日常からの息抜きを楽しんだ様子である。自然、このような先生の地位に目をつけて、殊更先生に近づこうとするチベット人が現れ、時には、要人、高官からも取りつぎを依頼されることがあつたという。しかし、すべて取り合わなかつた。それは先生の保身のためにも重要であつたと述懐されておられた。その点から先生の或る種の慎重さを見ることが出来る。ただ一回の例外があつた。それは当時ラツサの隅でチベット婦人と結婚して経済的にも不如意な生活をしていた矢島保治郎氏の場合である。先生は、十三世が意図した兵制改革に日本式軍隊を試みに用いるようにと進言して矢島氏の起用を図つた。これが成功して矢島氏の指揮する日本式の軍隊がダライ・ラマ十三世の親衛隊に採用されたことはよく知られている。

先生が殆んど表立つて参加した事業は、貨幣改革とラツサ版カンギール編纂の準備、それに付随した各地の版本調査の事業である。特に最後のものは先生の生涯を貫いた業績と関係があり、セラ寺に於ける学業以外で最も情熱をそそがれた仕事であつた。先生はダライ・ラマに全国の版本の統一カタログを編纂することを進言した。そのため、ダライ・ラマから自分が手本を示せと云われ、確かガンデン・ポタンの版本であつたかカタログをつくられたことがある。これが先生の文献蒐集によい手がかりを与え、周知のような優れたコレクションが残される機縁になつたのである。資金の調達には大変な苦勞をされたらしく、色々なお話があつた。この文献蒐集にはダライ・ラマの寵と宰相ツァロン・シャペの大きな援助がものを云つたと述懐しておられた。カムをはじめチベットの各地に人を派遣し、近いところは自らも赴いて典籍を集め、黄教系統の主要なものはほぼ完全に近い程度にまとめられた。

大正十二年三月インドを経て帰国された際の輸送隊の列は見るも見事で満足の限りだったと懐しんでおられた。帰国後届けられたものも含めて将来された経巻典籍は二万四千二百七十九部に及んだ。その量のみについて見ても、古今東西のいかなる探検隊が将来したものよりも遙かにぬきんでている。蒐集本には落丁が殆んどなく、印刷はチベット木版としては最高の鮮明度を有している。内訳は大蔵経に属するものが二万一千八百七十二部、経部五揃い、論部四揃いで、版は東部デルゲ版、西部ナルタン版、欽定ラッサ版である。これらは、京都大学、竜谷大学、東京大学、東北大学及び北米カリフォルニア大学に所蔵されている。大蔵経以外のいわゆる蔵外文献は東北大学と東京大学とに収められ、前者にはチベット高僧著作全集の著名なものが殆んど集められており、東京大学所蔵のものはチベットに於ける稀覯本、敕封本等の貴重なものによつて占められる。東北大学と東京大学にある蔵外典籍のみを例にとつても、諸外国の図書館でこれを凌駕するものを見るのは困難である。

先生は帰国後、東京帝国大学文学部嘱託としてチベット文献の整理に当られた。大正十四年八月、東北帝国大学講師に招かれ、講義の傍らチベット蔵経デルゲ版総目録の編纂に当られ、昭和九年八月これを刊行された。これはチベット大蔵経総目録として世界で始めて現れたもので、世界のチベット学界、仏教学界に於ける最大の貢献の一つに数えられる。先生はひきつづいて大蔵経外典籍の目録編纂に当り、その稿を殆んど終えながら第二次大戦を迎え、為めに、昭和二十八年五月迄その刊行を遂げられなかつた。これが「西蔵撰述仏典目録」であり、昭和三十年五月、日本学士院賞を受けた。この目録も組織的な蔵外目録として世界最初、最大のものであり、各国学者によつて盛んに利用されている。これらはいずれも精細な学術目録で、我国の学者によつて樹立された世界チベット学界の二大金字塔で

ある。

先生は昭和十七年三月東北大学を辞し、同四月より東京大学と慶応大学の講師を兼任、昭和二十五年二月迄、チベット学、仏教学の後進の育成に当られた。この間、慶応大学外語研究所、アジア文化研究所の創設にも参劃された。二十五年、アメリカのアジア文化研究所に招かれ、両大学を辞して渡米、同研究所とカリフォルニア大学とに於いて研究と講議に当られた。昭和二十八年帰国し、昭和三十一年、ロックフェラー財団の援助で東洋文庫にチベット学研究センターが設けられると、主任研究員として招かれ、創設期にはチベット人研究者銓衡のために渡印され、傍ら貴重なチベット文献を蒐集して帰国された。以来、同センターの研究を指導し、チベット学の専門家の育成に当つておられた。

先生は東北大学に在籍の頃、関東軍から招かれて満州、北支に滞在されたことがある。関東軍が先生を迎えたのはラマ教圏の蒙古側からトウプテン・ゲンツェンなる日本人を折衝の相手に指名してきたからであつた。軍がこの人物から先生の名前を割り出すのに大分手数を経たということである。ラマ教圏と日本とに於ける先生への評価の差を見ることが出来よう。ダライ・ラマ十三世自身が先生をどれ程評価していたかは誰にでも興味のあることであろう。このことは、ダライ・ラマの歿後にチベットの政府から届いた「ダライ・ラマ十三世が臨終に遺された御言葉に従つてチベット政府がラツサ版カンギュール一揃いをここに贈る。」という公文書が最も端的に説明しているように思う。

先生は亡くなる直前まで不自由な眼でロンチェン・ラブチャムパの著作のような難解な書物を読んでおられた。出版する予定はおろか発表するお考えもなかつたのであろうが、メモを取つて読んで居られた。



今日、ロンチェン・ラブチャムパの著作を読みこなせるチベット学者は世界中でも数える程しかいない筈である。惜しいことは、我が国のチベット学界が多田先生の得てこられたものをひき継ぐに充分なだけこれまでに発展を遂げなかつたことである。

今日、我国のチベット学界の指導的な学者は殆んど先生の門下生によつて占められ、仏教関係ではその盛んなこと欧米諸国に比しても遜色がない。先生の将来されたチベット文献は質量共にラマ教圏外随一をほこることが出来、欧米諸学者の垂涎の的となつている。チベット学の未来は、先生の蒐集本によつて、努力さえ重ねるならば発展を保証されているようなものである。これらの遺産を充分に利用することだけが先生の尊い御苦勞に酬いる最もよい道であらうと思う。

### 主要著書論文一覽

#### 著書目録

##### 一、西蔵大蔵経総目録

東北帝国大学法文学部 昭九・一〇、七〇三頁

##### 同索引

同右

同右 一二四頁

##### 二、チベット

岩波書店

昭一七・四、一七五頁、地図一

##### 三、西蔵撰述仏典目録

東北大学文学部

昭二八・五、五三一頁

##### 四、西蔵仏画釈尊伝

チベット文化宣揚会

昭三三・二、三四葉(写真)、三九頁(和文)、四四頁(英文)

##### 五、The Thirteenth Dalai Lama

The Centre for East Asian Cultural Studies 昭四〇 一一五頁(本文) 三〇葉(写真)

論 文 目 録

- 1 西蔵大蔵経  
同文館哲学辞書 大正一三
  - 2 西蔵の仏教  
宗教研究 新第三卷第二号 大正一五・三
  - 3 喇嘛教の倫理観  
岩波講座倫理学 第四冊 昭和一三
  - 4 瑜伽行派の分派  
東北大学文化 第六卷十一号 昭一四・一一
  - 5 チベットに対するイギリスの進出過程  
慶応大学亜細亜研究 昭一九・三
  - 6 成吉思汗作法について  
慶応大学 語学論叢第一輯 昭二三・五
  - 7 ラッサの本屋  
紀伊国屋 机 昭三一・九
  - 8 チベットの本  
国立国会図書館読書春秋 昭二六・六
  - 9 パルカンについて  
日本西蔵学会々報 昭三三・九
  - 10 Dalai-bla-ma and Pan-chen-bla-ma.  
Young East 昭三四
  - 11 ヒマラヤ山中の幟  
叢函 二六卷五四号 昭三五・八
- 其他 随想類

# 四 職 員

理事会

理事 長

細川 護 立

(文化財保護委員会委員)

専務理事

榎 一 雄

(財団法人東洋文庫研究部長 東京大学教授)

理 事

有 光 次 郎

(東京家政大学・武蔵野美術大学学長)

岩 井 大 慧

(駒沢大学教授)

小笠原 光 雄

(株式会社三菱銀行相談役)

大 原 総 一 郎

(倉敷レイヨン株式会社々長)

川 北 禎 一

(株式会社日本興業銀行会長)

河 野 六 郎

(東京教育大学教授)

酒 井 杏 之 助

(株式会社第一銀行相談役)

高 垣 寅 次 郎

(財団法人日本学術振興会理事長 成城大学学長 日本学士院会  
員)

辻 直 四 郎

(国立国会図書館支部東洋文庫長 日本学士院会員 東京大学名著  
教授)

評議員会  
監事  
評議員

徳川宗敬 (社団法人日本博物館協会々長)

松方三郎 (株式会社国際テレビフィルム社長)

松本重治 (財団法人国際文化会館理事長)

山本達郎 (東京大学教授)

岡東浩 (東山農事株式会社専務取締役)

阿部賢一 (早稲田大学総長)

磯野長蔵 (株式会社明治屋会長)

梅原末治 (京都大学名誉教授)

奥田東 (京都大学学長)

大河内一男 (東京大学総長)

小泉信三 (昭和四十一年五月十一日逝去)

新村出 (日本学士院会員 京都大学名誉教授)

高橋竜太郎 (協和醸酵工業株式会社取締役)

永沢邦男 (慶応義塾大学塾長)

俣野健輔 (飯野海運株式会社取締役会長)

総務部  
部長  
小林吟重郎

参事 平野 豊 松前 義治  
 助手 鈴木 千代子 田口 幸子 中山 ミヨ  
 山下 久代 黒崎 尚子 (昭和四十一年七月退職)

技能員 秋元 美恵子  
 石井 浜吉 白倉 豊松 勝間 勇次郎 染谷 コウ

作業員 石井 浜吉 白倉 豊松 勝間 勇次郎 染谷 コウ  
 臨時雇員 星野 久子 三馬 勝利

図書部 部長 辻 直四郎  
 司書 石黒 弥致 中島 正之 森岡 康 渡辺 兼庸

司書補 宇都木 章 (昭和四十二年三月退職 青山学院大学助教授 兼任研究員)  
 秩父 良子 広瀬 洋子 谷治 嘉紀

技能員 池田 直人 熊田 信次郎 小林 輝男 児野 寿満子  
 堤 栄次郎

臨時雇員 有岡 鋼三 北爪 幸子 後藤 加奈子 鈴木 洋子  
 立花 孝全 西園 一男 堀内 安雄

研究部 部長 榎 一雄  
 研究顧問 岩井 大慧

東洋学連絡委員会委員

岩村 忍  
(京都大学人文科学研究所教授)

梅原末治

辻直四郎

原田淑人  
(日本学士院会員)

村田治郎  
(京都大学名誉教授)

山本達郎

板野長八  
(広島大学教授)

岩井大慧

岩生成一  
(法政大学教授)

江上波夫  
(東京大学東洋文化研究所教授)

榎一雄

貝塚茂樹  
(京都大学人文科学研究所教授)

鈴木俊  
(中央大学教授)

塚本善隆  
(京都国立博物館長)

辻直四郎

長尾雅人  
(京都大学教授)

仁井田 陞 (昭和四十一年六月二十二日逝去)

福井 康順 (早稲田大学教授)

松本 信広 (慶応義塾大学教授)

宮崎 市定 (京都大学教授)

森 鹿三 (京都大学人文科学研究所教授)

山本 達郎

吉川 幸次郎 (京都大学教授)

名誉研究員

P・ドゥミエヴィユ (フランス学士院会員 前コレージュ・ド・フランス教授)

S・エリセーエフ (ソルボンヌ大学教授 元ハーヴァード・エンチン研究所長)

W・フックス (ケルン大学教授)

B・カルグレン (前スウェーデン王立極東古代博物館長)

E・O・ライシャウアー (ハーヴァード大学教授 前ハーヴァード・エンチン研究所長)

W・サイモン (英国学士院会員 前ロンドン大学教授)

G・トゥッチ (ローマ大学教授 イタリア中東亜研究所長)

W・T・デ・パリイ (コロンビア大学教授)

A・フォン・ガベイン (ハンブルク大学教授)

研究員

研究員(兼任)

石田 正憲

青山 定雄

荒 松 雄

市古 宙三

岩 生 成 一

梅 原 末 治

岡 田 英 弘

亀 井 孝

神 田 信 夫

菊 池 英 夫

北 村 甫

河 野 六 郎

後 藤 均 平

佐 伯 富

末 松 保 和

鈴 木 俊

(中央大学教授)

(東京大学東洋文化研究所助教授)

(お茶の水女子大学教授)

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授)

(一橋大学教授)

(明治大学教授)

(山梨大学助教授)

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授)

(新潟大学助教授)

(京都大学教授)

(学習院大学教授)



周藤吉之  
(東京大学教授)

関野雄  
(東京大学東洋文化研究所助教授)

田川孝三  
(東京大学専任講師)

田中時彦  
(東海大学助教授)

田中正俊  
(横浜市立大学助教授)

鶴見尚弘  
(山梨県立女子短期大学助教授)

鳥海靖  
(東京大学専任講師)

中嶋敏  
(東京教育大学教授)

坂野正高  
(東京都立大学教授)

藤枝晃  
(京都大学人文科学研究所助教授)

松本信広

松村潤  
(日本大学助教授)

三根谷徹  
(東京大学助教授)

宮坂宏  
(専修大学専任講師)

村松祐次  
(一橋大学教授)

護雅夫  
(東京大学助教授)

山根幸夫 (東京女子大学教授)

山本達郎

研究室研究員  
多田等観 (昭和四十二年二月十八日逝去)

ケツン・サンポ ソナム・ギャーツォ ツェリン・ドルマ

研究生

山口瑞鳳

山崎元一 (昭和四十二年三月退職 ユネスコ東アジア文化研究センター研究員)

草野靖 (昭和四十二年三月退職 日本女子大学助教授 兼任研究員)

丹番二西義郎

助手

秋山節子 荒川裕子 小野田サヨ子 白川邦子

二瓶幸子 双川俊江 本庄比佐子

国岡妙子 (昭和四十二年一月退職)

臨時雇員

後藤治子 平田美智子 星実千代

三井昌子 緑川勝子 湯川恭敏

# 五 事 業

## 1 刊 行 図 書

○中村拓著「鎖国前に南蛮人の作れる日本地図」(Ⅱ) 東洋文庫論叢第四十八 B 4 判二二六頁、昭和四一年二月一〇日

### 目 次

凡例、補遺

目次

表目次

挿図目次

小引

### I 「GERARD MERCATOR 型」資料

1. Anonym, n. d. [1545—1548]. Planisphere Portugais.  
(Bibl. Vallicelliana, Roma).
2. GIROLAMO RUSCELLI. Ptolemeus Geogr., 1561.
3. G. MERCATOR, "Nova et accurata orbis terræ.....1569.
4. A. ORTIJUS, "Theatrum Orbis Terrarum", 1570.
5. S. MUNSTER, 1575...Cosmographia.
6. DANIEL CELLARIUS, 1578, "Speculum Orbis Terrarum"
7. ANDRE THEVET, 1575... La cosmographie universelle.
8. LA POPELINIÈRE, 1582. Les trois mondes.
9. JOAN MARTINES DE MESSINA, 1582. Portolano Atlas.  
(Bibl. Arsenal, Paris).
10. JOAN MARTINES EN MESSINA, 1583. Portolano Atlas  
(Bibl. Nat., Paris).
11. JUAN MARTINES, 1587. Portolano atlas. (Bibl. Nac., Madrid)
12. RUMOLD MERCATOR. 1587. "Mercator Atlas."
13. CORNELIS DE JUDAËS, 1593. "Speculum Orbis Terrarum."
14. RICHARD HAKLUYT, 1589. "The Principall Navigations....."
15. GIOVANNI PIETRO MAFFEI, 1593. "Historiarum....."

16. ANTONIO SPANNO, 1593. Ivory terrestrial globe.  
(I. P. Morgan, New York)
17. G. ANTONIO MAGINI, 1596. Ptolemæus, Venetia.
18. GIOVANNI BOTERO, 1596. "Geographische Landtafel"
19. CORNELIY WYTFELIET, 1597. "Descriptionis Ptolemæicæ....."
20. J. H. VAN LINSCHOTEN, 1598. "His Discours of Voyages....."
21. FRANÇOIS PRETTE, 1598. "Beschrybinge vande obertreffelike....." (Thomas Cavendish & Francis Drake)
22. LEONARDO CERNOTTI, 1598. Ptolemæus, Geographia, Venetia.
23. JOANNES MATALIVS METELLVS, 1600. "Asta Tabulis æneis....."
24. MATHIAS QUADVS, 1599. "Enchiridion Cosmographicum."
25. GOTARVDVS, ARTIVS, 1608. "Historia Indiar Orientalis....."
26. ANTONIO DE HERRERA, 1601. "Historia general de los hechos de los Castellanos en las islas i tierra firme....."
27. DIETRICH DE BRY, 1624. Novi Orbis pars duodecima
28. JOANNES OLIVA, 1613. Portolano atlas. (British Museum, London)
29. GIOVANNI OLIVA, 1616. Portolano atlas. (Bibl. dell'Istituto di Fisica di Arcetri, Firenze)
30. JUAN BATTISTA CAVALLINI, 1642. Portolano atlas. (British Museum, London)
31. ATHANASE KIRCHER, 1665. "Mundus subterraneus..."
- II. 「DIOGO HOME 型」資料
1. LORO HOME, 1554. Planisphère Portugais. (Museo degli Strumenti Antichi, Firenze).
2. DIOGO HOME, 1558. Portolano atlas. (British Museum, London)
3. [DIOGO HOME, c.1558]. Portolano atlas. (Bibl. Nat., Paris).
4. ANDREAS HOMO, 1559. Planisphère Portugais. (Bibl. Nat., Paris).
5. DIOGO HOME, 1561. Portolano atlas. (Hofbibliothek, Wien).

6. BARTOLOMEU VELHO, 1561. Planisphere Portugais. (Accademia delle Belle Arti, Firenze).
7. DIOGO HOMEM, 1568. Portolano atlas. (Königliche Bibliothek, Dresden).
8. Anonym., 1573. "Orbis terrarum a hydrographo Hispano in plano delineatio." (TELEWEL t. I, pl. VI).
9. DOMINGOS TEIXEIRA, 1573. "Carte portugaise des parties du monde connues." (Archives du Service Hydrographique de la Marine, Paris).
10. [JOAN MARTINES, c. 1582] Portolano atlas. (British Museum, London)
11. JUAN RIEZO ALLAS OLIVA, 1580. Portolano atlas. (Biblioteca Real, Madrid).
12. ANTONIO MILLO, 1582. Planisphere. (British Museum, London).
13. ANTONIO MILLO, 1582—1583—1584. Portolano Atlas. (Bibl. Vittorio Emanuele, Roma)
14. ANTONIO MILLO [c. 1582]. Portolano atlas. (Stadt-bibliothek, Ulm)
15. ANTONIO MILLO, 1586. Portolano atlas. (Königliche Bibliothek, Berlin)
16. BARTOLOMÉ DE OLIVES DI MAJORCA, c. 1580. Portolano Atlas (Biblioteca Vaticana, Roma)
17. Anonyme, s. l. n. d. [1570—1580]. Carte d'un globe en fuseaux. (Bibl. Nat., Paris.)
- III. 「ABRAHAM ORTELIUS 型」資料
  1. A. ORTELIUS, 1570. "Theatrum Orbis Terrarum."
  2. A. ORTELIUS-BERTHELI-CAMOZZO, n.d. "Asiae Orbis Partium Maximae nova descriptio." (Museo Civico, Venezia)
  3. SEBASTIAN MUNSTER, 1588, "Cosmographia"
  4. I. A. MAGINI, 1596. Ptolemaeus, Venetiae.
  5. LEONARDO CERNOTI, 1598. Ptolemaeus, Venetiae.
  6. GIOVANNI BOTERO, 1599. "Relationi Universali di Giovanni Botero"
  7. MATTHIAS QUADUS, 1599. "Enchiridion cosmographicum"
  8. JOANNES MATALALIUS METELLUS, 1600. "Asia tabulis aeneis secundum mariones geographicas delineata....."
- IV. 『Vaz DOURADO 型』資料
  1. LAZARO LUIZ, 1563. Portolano atlas. (Real Academia

- das Sciencias, Lisboa).
2. [FERNÃO VAZ DOURADO], [1568以前]. Portolano atlas. (Duque de Palmela, Lisboa).
  3. FERNÃO VAZ DOURADO, 1568. Portolano atlas. (Duque de Alba, Madrid).
  4. [FERNÃO VAZ DOURADO], 1568. Portolano atlas. (Bibl. Nac., Lisboa).
  5. FERNÃO VAZ DOURADO, 1570. Portolano atlas. (Bibl. Nac., Madrid).
  6. Anonym., n. d. [F. VAZ DOURADO, 1570]. Portolano atlas. (Huntington Library and Art Gallery, San Marino, California).
  7. FERNÃO VAZ DOURADO, 1571. Portolano atlas. (Torre do Tombo, Lisboa)
  8. FERNÃO VAZ DOURADO, [1573]. Portolano atlas. (British Museum, London)
  9. FERNÃO VAZ DOURADO, 1580. Portolano atlas. (Hof- und Staatsbibliothek, München)
  10. LUDOVICO GEORGIO, 1584. "Chinae, olim Sinarum regionis, nova descriptio" in "Theatrum Orbis Terrarum."
  11. RENNWARD CYSAT, 1586. "Wahrhaftiger Bericht von den newertundenen Japanischen Inseln....."
  12. PETRUS MARTYR, 1587. "De orbe novo decades VIII, annot. Rich Hakluyti."
  13. A. ORTEIUS, 1589. "Maris Pacifici....." in Theatrum Orbis Terrarum.
  14. GIO. BATT. MAZZA, n. d. "Americae et proximarum regionum oroe descriptio."
  15. GIACOMO PICCAGLIA, 1589. "Descrittione e sito del Giapone"
  16. PERRUS PLANCIUS, [1590]. "Orbis terrarum typus, de integro multis in locis emendatus."
  17. Anonyme, n. d. (1590直後). Planisphère. (Archives du Service Hydrographique de la Marine, Paris)
  18. JOAN MARTINES DE MESSINA, 1591. Portolano atlas. (Königliche Bibliothek, Berlin).
  19. PERRUS PLANCIUS, 1592. "Nova et Exacta Terrarum Orbis Tabula Geographica ac Hydrographica." (Colegio del Corpus Cristi, Valencia)
  20. CORNELIUS DE JUDAENS, 1593. "Speculum Orbis Terrarum Hydrographia Horologio-graphia Geographia."

21. JAN HUYGHEN VAN LINSCHOTEN, 1595—1596.  
“Itinerario.....”
22. JODOCUS HONDUS, n. d. “Vera totius expeditionis  
nauticae descriptio.....”
23. GIOVANNI BOTERO, 1598. “Relationi Universalis di  
Giovanni Botero.”
24. CORNELIUS DOETSZ., Eedam, 1598. 「南洋羣路図」(Dutch  
portolano). (東京国立博物館)
25. Anonym., n. d. 「西洋羣路図」(Dutch portolano). (東京  
国立博物館)
26. EVERET GUSBERTSZ., 1599. Dutch portolano. (Bibl.Nat.,  
Paris)
27. DIETRICH DE BRV, 1599. “*Grosse Reisen*”, America Pars  
VIII, Addimentum.
28. HENRICUS FLORENTIUS A LANGREN. n. d. “Asiae nova  
descriptio.”
29. HAKLUYT, The Principal Navigations..... — EMERIE  
MOLYNEUX OF LAMBETH — EDWARD WRIGHT —  
“SHAKESPEARE map”
30. GABRIEL TATTON, n. d. Portolano. (R. Biblioteca  
Nazionale, Firenze).
31. MATTHIAS QUADUS, 1600. “Geographisch Handtbuch.....”
32. JOHANNES MATALIVS METELLUS, 1600. “Asia tabulis  
aeneis.....”
33. PAULI G. F. P. N. MERULAE, 1605. “Cosmographiae  
generalis.....”
34. ANDREAS GARCIA DE CESPEDES, 1606. “Plys Vltra  
Regimiento de navegacion.....”
35. JOANNES OLINA, 1613. Portolano atlas. (British  
Museum, London)
36. GIOVANNI OLIVA, 1616. Portolano atlas. (Bibl.  
dell'Istituto di Fisica di Arcetri, Firenze)
37. Anonym (auteur francais), n. d. Portolano atlas. (Bibl.  
dell'Istituto di Fisica di Arcetri, Firenze)
38. ARNOLDUS FLORENTIUS A LANGREN, [c. 1625]. Globe  
terrestre. (Bibl. Nat., Paris)
39. ANTONIO DE HERRERA, 1601; 1615. “Historia general de  
los hechos de los Castellanos.....”
40. JEAN GUERARD DE DIEPPE, 1625. “Nouvelle description  
hydrographique de tout le monde. (Archives du  
Service Hydrographique Central de la Marine,  
Paris)

41. MARTINO MARTINI—ATHANASE KIRCHER, 1638. Carte MS. (Archives du Service Hydrographique Central de la Marine, Paris)
42. GIOVAN BATTISTA CAVALLINI, 1652. Portolano atlas. (Bibl. dell'Istituto di Fisica de Arcetri, Firenze)
43. TASIN(LE SR.), 1655. Carte generale de la geographie royalle.
44. FRANÇOIS DE LA MOTHE-LE VAYER-PIERRE DUVAL, 1663. "La géographie du Prince."
45. SAMUEL ENGEL, 1764. "Mémoires et observations géographiques et critiques sur la situation des pays septentrionaux de l'Asie et de l'Amérique."
46. ROBERT DE VAUGONDY, 1772. "Carte des parties Nord et Est de l'Asie."
- 「DOURADO 型」から次代の型への移行  
 V. 「JOAN MARTINES EN MESSINA 図」資料
1. JOAN MARTINES, 1578. Portolano atlas. (British Museum, London).
2. JOAN MARTINES, 1578. Portolano atlas. (British Museum, London).
3. JOAN MARTINES, 1582. Portolano atlas. (Bibl. de l'Arsenal, Paris).
4. JOAN MARTINES, 1582. Portolano atlas. (British Museum, London)
5. Anonym., n.d. [J. Martines, c. 1582]. Portolano atlas. (British Museum, London).
6. JOAN MARTINES, 1583. Portolano atlas. (Bibl. Nat., Paris).
7. JOAN MARTINES, 1587. Portolano atlas. (Bibl. Nac., Madrid).
8. JOAN MARTINES, 1591. Portolano atlas. (Königliche Bibliothek, Berlin).
9. Anonym., n. d. [J. Martines, 1578]. Portolano atlas. (Museo Civico, Venezia).
- 時代決定に対する Joan Martines の作品の重要性
10. Anonym., n. d. Portolano atlas. (Bibl. Angelica, Roma).
11. JOAN GONZALEZ DE MENDOZA, 1589. Il gran regno della China.....Bologna.
- Maps of Japan made by the Portuguese before the closure of Japan, by Hiroshi Nakamura



Résumé.

Part I Table of contents

Part III 69 collytype and 1 polychromic reproductions

of old maps, most valuable and most important sources for the redaction of this book

Part I

- 「スタイン敦煌文献―及び研究文献に引用紹介せられたる西域出土漢文文献―分類目録初稿 非仏教文献之部 古文書類Ⅱ(寺院文書)」東洋文庫敦煌文献研究委員会編 B 5判 二〇七頁 索引七頁 油印、昭和四二年三月三一日

本目録は、東洋文庫所蔵マイクロフィルムに基き、British Museum 蔵 Stein 卿収集敦煌漢文文献を主体とし、これに従来研究文献に引用紹介せられたる敦煌・吐魯番地域を中心とする中央アジア各地出土の漢文古文書(木簡、碑刻を除く紙文書のみ)を加え、内容別に分類して検索に便ならしめたものである。本分冊には、先に刊行せる「古文書類Ⅰ(公文書)」に続いて、寺院関係古文書を収録した。執筆は、中央大学大学院学生土肥義和氏が担当した。

- 「漢籍分類目録集部 東洋文庫之部」東洋学文献センター連絡協議会編 B 5判 一五二頁 索引四二頁 一九六七年三月
- 「東洋文庫洋書目録 定期刊行物」国立国会図書館支部東洋文庫刊 B 5判 一三五頁 一九六七年三月
- 「近代中国研究第七輯」近代中国研究センター編 A 5判 四二三頁 一九六六年二月
- 「中国社会経済史語彙」星斌夫編 B 5判 四二五頁 一九六六年二月
- 「解放日報記事目録Ⅰ」近代中国研究センター編 B 5判 二四三頁 一九六七年一月
- 「清末の秘密結社資料編」佐々木正哉編 B 5判 三〇〇頁 一九六七年三月

- 「近代中国研究センター彙報」7 B5判 三三頁 一九六六年六月
  - 「近代中国研究センター彙報」8 B5判 三三頁 一九六六年九月
  - 「東洋文庫年報(昭和四〇年度)」 A5判 一一四頁 昭和四一年一二月
- 複刊図書

- 石田茂作著「写経より見たる奈良朝仏教の研究」 B5判 五二四頁 昭和四一年七月
- 常盤大定著「支那に於ける仏教と儒教・道教」 B5判 八一八頁 昭和四一年八月
- 宮良当壮編「八重山語彙」 B5判 六五三頁 昭和四一年八月
- 宇野円空著「マライシアに於ける稲米儀礼」 B5判 七四八頁 昭和四一年一月

2 講演会 (昭和四十一年度東洋学講座)

春 期

第一九七回 五月十八日

「中国芸術の六朝から唐代への展開序説」

日本学士院会員 原 田 淑 人

第一九八回 五月二十五日

「楷書の成立―楼蘭・吐魯番文書による四〜六世紀の解明―」

慶応義塾大学講師 西 川 寧

第一九九回 六月一日

「敦煌絵画における説話表現の展開」

第二〇〇回 六月八日

「顔氏家訓について」

第二〇一回 六月十五日

「六朝から唐代へ——中国文学史の移り変り——」

秋 期

第二〇二回 十月十二日

「高昌国とその周辺」

第二〇三回 十月十九日

「律令学における私の立場」

第二〇四回 十月二十六日

「十一・十二世紀におけるモンゴル部族社会の構造」

第二〇五回 十一月九日

「南朝梁の官僚層」

第二〇六回 十一月十六日

「史記抄について」

東京国立文化財研究所第一研究室長 秋山光和

大阪大学教授 守屋美都雄

名古屋大学教授 入矢義高

中央大学教授 嶋崎昌

東北大学名誉教授 曾我部静雄

東京都立大学助教授 村上正二

九州大学助教授 越智重明

京都大学人文科学研究所所長 森鹿三

## 「中国芸術の六朝より唐への展開序説」

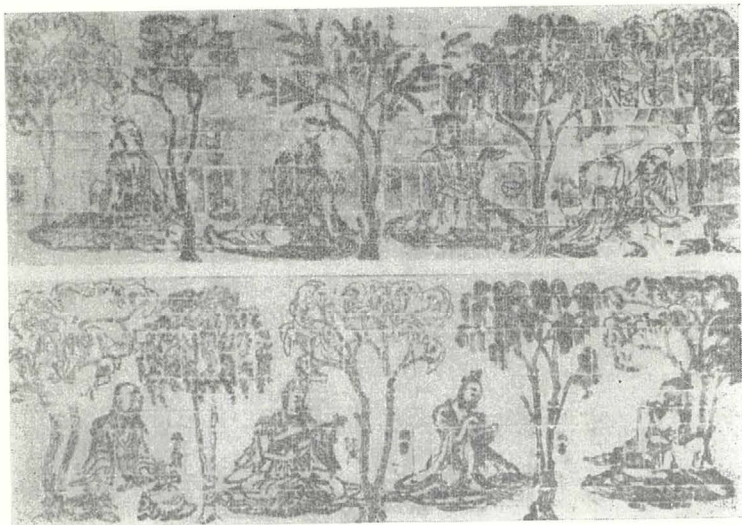
原 田 淑 人

一

そもそも中国芸術の進展の跡を顧ると、新石器時代の仰韶文化期の彩陶や、竜山文化期の黒陶に於いてその片鱗をあらわし、殷周時代に及んでその芸術を代表する青銅祭器に於いて驚異的発達を見せている。併しこの種の青銅器は、外面的には古代世界の芸術中卓越せる地位を占めているものの、内面的にはその図紋や形態に今日なお太平洋岸未開民族の間に低迷せる原始文化の範疇を脱していない。然るに戦国時代になると、強烈な周王朝の封建的拘束が弛緩し、諸侯王の日常生活が向上するままに、工芸品の如き従来の宗教的臭味を払拭して開放的実用的傾向を生じたことは、周官考工記に見える各工人の技法や、当時の貴族の墳墓から出土する華麗な遺品の雄弁に物語るところである。この頃すでに東西文化の交流の萌芽が見え、西域の流沙を渡り、南海の怒濤を冒して西方の文物が次第に中国へ入つて来た。かの夜光の璧と称せられたガラス製璧が、玉璧を凌いで戦国諸侯の愛好の的となつたのはその一例である。漢代に入ると、一世を風靡した儒教及び神仙思想を背景とし、芸術は教訓的民俗的となり、絵画には歴史的人物や神仙竜鳳などを題材とするものが多くなり、そしてその描写手法は大に古拙的妙趣を示した。次いで六朝に至ると、仏教の隆盛に伴い、西方芸術の浸潤を来たし、仏像の如き山西の雲崗や河南の竜門諸石窟に見るが如き世界的

芸術を出現し、中国の芸術は漸く完成の域に達し、遂に唐代の黄金時代を迎えたのである。

次に中国の芸術品殊に絵画の如きは宋元以降は別として少数の伝世品、若干の画像石などを見るに過ぎなかつた。尤も古墳墓から発掘された遺物は恐らく万を以つて数うべきであろうが、多くは骨董商の手を経て徒らに愛玩の具に供され、もちろん型式手法のいかによつてその年代などある程度の推定は可能であるにしても、偶然の発掘や盗掘の結果出土したものである限り、学術的価値の減殺されること甚しいのである。然るに近年中国考古学の進展に随ひ、学術的発掘が中国全土に行われ、学者の手によつて出土した遺物は年々増大し、漢画像石の如き、従来山東省肥城・嘉祥兩県その他に於ける少数のものに限られていたが、現在では陝西・河南・安徽・江蘇・湖南・四川等各省に拡がり、その発見数は恐らく千をも越えたであろう。しかも絵画としては、この種石面に彫刻されたものに止まらず、河北省望都県浮陽公墓の壁画の如く肉筆彩画も増加し、精確に漢代絵画の手法を認識し得るようになった。また従来製作年代の兎角精密さを欠いていた陶俑の類も、これに伴う墓誌銘によつてその年代を、的確に知ることができたのである。この講演に於いて私の課せられた題目は中国の芸術の六朝から唐代への展開であるが、上叙のように近來各時代を通じて中国芸術作品の確実な資料が増加した機会に、時代を遡らせ、戦国頃から漢代に亘る芸術の新資料に拠つて六朝に到達するまでの趨勢について一言すると、戦国時代の絵画・彫刻・工芸品の類は近年湖南省長沙市付近や河南省洛陽付近の戦国時代墳墓からの出土品によつてその特質が把握され、その結果戦国の文物が漢代のその前駆をなし、漢代の文物はこれを承けて更らに六朝から唐代へと展開したことを確認し得るのである。



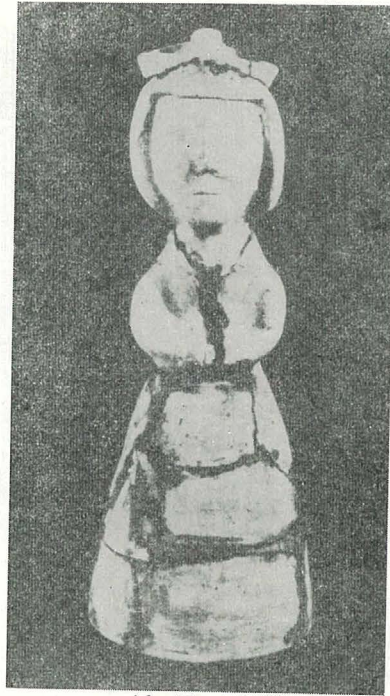
挿 図 一

さて私は幻燈によつて——本講演の要旨には紙数に限りがあるもので、幻燈(挿図)は少数に止めたことを諒承されたい。  
——中国芸術の縮図ともいふべき陶俑を主としこれに関連する資料の若干を選んで説明しよう。

近時江蘇省南京付近の南朝磚墓の発掘が屢々行われ、従来伝顧愷之筆女史箴図卷によつていわゆる氣韻生動的筆致を推察していたが、ここに南京西善橋東晋墓内の竹林七賢磚刻画の新資料を得たのである。凡そこの種南京付近発掘の磚墓には、これを構成する磚面に年号銘を刻するものがあつて、その時代を明示している。竹林七賢の磚刻画は墓室東西両壁面に列置しているのであるが、その配列が一面には四人、他の一面には三人となるので、後者には七賢の外に、春秋時代の高士榮啓期を加えて両壁面とも四人づつに整備しているのは、六朝の絵画が一種鑑賞的美術的の進歩を見せていることが感ぜられるのである。竹林七賢に關係のある図は東晋顧愷之筆に成るもののがあつたことが歴代名画記に見えているか

ら、東晋頃から流行したものとされる。この図に描かれた七賢は放逸耽酒の情景をあらわし、いかにもこの時代の思潮を現実に指示している（挿図一）。

次に南京付近の東晋並びに南朝墓から出土する陶俑は男子も長裳を曳き、漢族の風俗を継承する観があり、その製作手法も古拙で漢俑に酷似している。また南京中



挿 図 二

山門外首窟園東晋墓、太元九年在銘の磚墓から出土した立女俑に、髪を膨らませ、頭上に両輪に束ねた髻(まげ)を戴いているものがある（挿図二）。この種の立女俑は南京付近の磚墓から屢々発見されるもので、晋書五行志に、

太元中、公主（皇女）婦女必ず髪を緩やかにし髻（まげ）を傾け、以つて盛飾となす。髻（かつら）を用ゆることすでに多く、恒に戴く可からず、すなわちまず木及び籠の上に於いてこれを装い、名づけて仮髻といい、或は仮頭という。

とある風俗に一致し、当時大に流行したことが推知される。北朝の芸術としては絵画には直接適切な資料は無いが、南満州輯安県や朝鮮平壤府外所在の高句麗古墳の壁画がその実例となり、彫刻には前に触れたように雲岡や竜門の石仏が存在する。また陶俑としてはカナダ・トロント市のオ



挿 図 三

ンタリオ博物館に珍藏される後魏の孝昌九年（五三三年）中山王熙の墓誌と伴出したと伝えられる一群の陶俑が有名である。近年河北省景県から封氏一族の磚墓が発見され、墓誌銘によつて年代的確な、北魏から隋代にかけての資料を得た。また山西省大原県隋の張肅俗墓出土の陶俑も北朝式陶俑の好資料である。なお河南省鄧県発見の磚墓には、これを構築する磚面にも北朝式陶俑とその規を一にする風俗をあらわす人物像の浮彫があつて（挿図三）、当代の陶俑と併観すべきものである。この種の陶俑は男子にあつては胡服から変化した、いわゆる袴褶を着し、膝の辺りで袴を縛るものが多く認められ、女子にあつては男子同様窄袖の衣を被り、狭小な袴を穿がつものが目立ち、南朝人のなお漢民族の旧俗を墨守する傾のあるのとはおのずから趣を異にし、またその製作技術の面に於いても、南朝のそれが漢俑の素樸な型式を遺存しているのに比べて、すこぶる造形的技術の進歩の痕を示している。そしてその形体について概言すれば、北朝の人物像は面長で、瘦軀の姿を表わし、いわゆるアーケイク・スマイルを漂わして、その間おのずから当時の仏像に吻合するものがあり、その描写はすでに写實的生動的境地に達しているかの観がある。

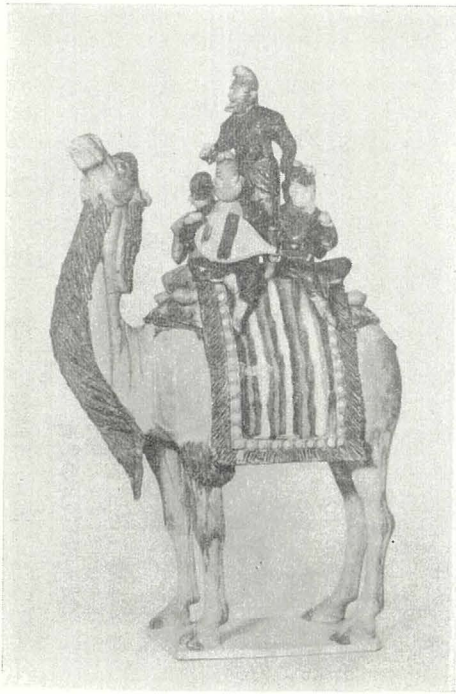


唐代の芸術はわが国奈良朝の寺院に伝世遺存するものが多く、仏像彫刻はいうまでもなく、絵画・建築すらその実物を留め、工芸品に至っては、わが東大寺正倉院を始め、各所に遺存し、しかもその保存の完好であることは改めて言う要はあるまい。また新疆省（中央アジア）の沙中に千古の眠を続けていた諸芸術品が欧州学者並にわが西本願寺調査隊の手によつて再び天日の下に出現したことも、前代に比して唐代芸術の研究資料は決して乏しいとはいわれない。併し中国国土にあつては、従来骨董愛玩の具として売買の対象となつたものが多数を占め、時には巧妙な贋物すら横行し、學術研究に支障を来たす嫌があつたが、近年中国考古学者の奮起により、唐代遺跡の學術的発掘が漸く盛んとなり、肉筆による壁画や、墓誌銘を伴う唐墓出土の陶俑はその数量頓に増加して、唐一代を通じ、少くとも初期・盛期・晩期の時代順を逐つて細密な検討を可能ならしめるのである。以下その若干の例を選んで観察してみよう。

近時新たに発見された壁画の二三の例を見ると、陝西省乾県で発掘された唐中宗神竜元年（七〇五年）に造営された永泰公主墳墓はその尤たるものであつて、その随所の壁面に男女人物の彩画が描がかれ、また石槨には同じく男女の画像が細刻されている。この種の画像は写実の妙をつくし、当代画匠の手腕を窺うことができる。なお唐代には石槨に被葬者関係の人物像を彫刻することが多く、その遺例の発見されているものが少くない。唐の玄宗が梅妃の死を悼み、石工に命じてその肖像を石に刻したことが伝えられているのもこの類の絵画であろう。陝西省長安県南里王村発見の中宗の景竜二年（七〇八年）の墓誌を伴う韋洞墓にも豊富の容姿をそなえた男女人物を描いており（挿図四）、なお同省咸陽県張底湾発見の睿宗景雲二年（七一一一年）薛氏墓にも男女人物を彩画している。



挿 図 四



挿 図 五

陶俑の數例を挙げると、陝西省咸陽景張底灣発見の唐太宗貞觀十六年（六四二年）独孤開廷墓出土のものや陝西省西安市郊外韓林寨出土の高宗乾封二年（六六七年）段伯陽妻高氏墓出土の初唐に属するものから、陝西省西安市郊外南何村発見の唐玄宗開元十一年（七二三年）鮮于庭誨墓出土のものに至る陶俑の如きその間に製作法の漸進的變化を見ることが出来る。初唐の陶俑はなお南北朝の余風を残し、瘦軀の

男女像が多いが、開元天宝の盛時に及ぶと、人物の表現は益々豊満となり、鮮于庭誨墓出土の女子俑の如き、わが正倉院の樹下美人屏風絵を思わしめる。西安市郊外の唐墓から発見された陶俑にはこの種の豊艷な女子像が多く、一面には八世紀頃の仏像の体軀と規を一にし、時代的芸術の趨勢に由るものであるが、他の一面には楊貴妃姉妹を代表とする豊碩濃艶の美人を理想とする当時の嗜好に投じたものでもあろうか。鮮于庭誨墓出土の陶俑中には五彩釉を施した駱駄背上胡人奏樂像（挿図五）があり、胡人俑中白眉の作品たるを失わない。

以上私は中国芸術の変遷について概観し、殊に六朝から唐への展開について、陶俑を主として考察を試みたのであるが、この発展の情況は恐らく他の芸術の面に於いてもこれに類する傾向を示しているのではあるまいか。

## 「楷書の成立」

——敦煌・樓蘭・吐魯番出土文書による四、六世紀の解明——

西川 寧

### I・楷書成立の意義

#### a・書体としての第三典型

漢字の書体の基本的なものに篆・隸・楷・行・草の五つがある。中で篆・隸・楷の三体が標準となり、行・草は補助体となる。篆書は書体の第一典型として前三世紀にきまり、隸書はその後二百年を経て前一世紀に成立し、楷書は

さらに四百年おくれて四〜五世紀に第三の典型として生まれる。楷書の地位はその後今日まで変らない。今日の新聞雑誌に常用される活字もまた楷書体である。漢字は楷書以上に発展することが出来ないであろう。

楷書に先だつ隸書では、横画は篆書同様水平に位置しながら、筆勢には「波勢」があらわれ、従つて力動感が加つて篆書の左右相称が破られ、裝飾性と動性が加わり、一字の構成では一部は篆書のように正面向きだが、一部は左向きとなる。楷書はこれと全くちがひ、一筆の構造に「三過折」があらわれ、自然、横画の右肩が引きあげられるに從つて一字の右肩が上り、一字は左向き前のめりの構成をとり、全体的に力の均衡を基盤とする有機的構造をもつ。

#### b・楷書体の成立とその意義

楷書は、漢字表現の第三の典型として、成立以来今日まで千五百年を経た。楷書の根には知性の支えがある。ここに字画の明確性と合理性が生まれ、そのために書写上の機能性がある。実用文字の標準体としての長い生命をもつたのはこのためである。

芸術書道の面からいうと、まず五世紀におこつた古典主義的審美観の自覚は楷書体を標準とした。北派書道として後世にうたわれた魏齊代のめざましい発展は楷書を主な舞台とする。隋唐間の書のピークも楷書を舞台とする。この面でも楷書の意義は大きい。

#### II・楷書体の発生と展開

敦煌・楼蘭・吐魯番出土の文書は楷書体の発生、完成、その後の発展を最もよく示す。楷書の萌芽は三世紀にさか

のほり、完成は四〜五世紀となる。以下楷書体の萌芽から跡づける。

a・秦始期（遺物的に二六三〜二七〇）

隸書は典札的に用いられ、通用体は行押書である。[Chavannes: Documents Chinois, Pl. XXII] など。行押書は後の行書の原形だが、筆のリズムはまだ全く隸書の波勢に支配され、且つ一点一画の自律性が弱くて、情趣の流れにまかせるため、粗放でどんよりとした感情が印象づけられる。

中 [Conrady: Chinesischen Handschriften, Tafel V. No. 5, I] など、横画の筆の起止に楷書的なものが見え、[ibid. T. XVIII. No. 14, 1~2] は速写性が少く、隸書要素の多い中に、一字を四角にまとめようとし、また三過折の骨法や縦画のはね（趯勢）が見える。楷書技法の部分的発生である。石刻では呉・谷朗碑（二七〇）が隸書の一体であるが、一字を四角にまとめようとする所に楷書への指向が見える。

b・元康—永嘉期（二九六〜三二二）

同じく行押書が通行体であり、草書がのびるが、性格は変わってくる。一点一画の自律性が出て来て、隸書の波勢はしだいに吸収され、直線的な傾向が増し、一字の構成に緊密性が見える。知性がはたらき出し、印象は明快となる。

[Con. ibid. T. XXIII. No. 20, 1; Ch. No. 910, 912; Mâspero: Documents Chinois, No. 249] など。

中で諸仏要集経（二九六、西域考古図譜・下・仏典 Pl. 2）は隸書系統に属するが、趯勢が見え、右肩をまげる所に、楷書に見る三折の骨法（後の転折）に近いものがあらわれ、[Con. T. VIII. No. 8, 1~3] で横画の起止、転折、および右下へ払い出す筆（波発）が見える。隸書の波勢の吸収にともなう、こうした部分の自律的形成が注目される。

## c・建興—永和期（三三〇—三五六）

スタイン発掘の建興十八年木簡（三三〇年、Ch. No. 886）や大谷隊橋瑞超氏発見の李柏書稿（三四六年、西域譜・下・史料Pl. I）では、まだ隸書的波勢を脱却しないが、行書としての技法が進歩し、前のめりの構成、右まわりの渦巻の筆勢がのびる。泰始の情懐と永嘉の知性が融合した所にあらわれた豊腴と蕭洒である。

こうした中で、焉著書派<sup>②</sup>〔Ch. No. 930～938 etc.〕は漢人派ではないとしても、一点一画を独立させて一字を四角にまとめようとする所は、三三〇年代の段階を示す重要なものである。また漢人派では張超濟という人の書翰の一角に「Con. T. XXXIV No. 31, 1～6; ibid. T. XXXVIII No. 35; Ch. No. 906 etc.】がある。(1)行書風の連綿がなくて点画が独立し、(2)三過折、(3)趯勢、(4)波発などが確実さを増し、力の均衡の極限まではまだ程遠いが、従来見なかった楷書への指向を示す。楼蘭で全く同じ場所から出土した〔Con. T. IX, No. 9.】も同筆と思われるが、少し骨法をはげしくすれば、ほとんど楷書に近づく形である。この一類は最も波勢を脱却し、最も楷書に近づいたもので、今ある限り楷書の萌芽である。この一類は李柏尺牘と同じ三四六年頃の書写であることを特に注意したい。

## d・永和以後

この後、五世紀半までの漢人書派の第一資料が欠けている。前秦・譬喻經（三五九・書道博物館）は焉著の系統で、情趣的なものを排斥して奇矯であるが、点画の独立と直線性、一字の四角な構成は楷書段階を示す。西涼・十誦比丘戒本（四〇五年・スタイン No. 797.）も同じ系譜に属する。西涼・建初十二年戸籍（四一六・スタイン No. 113）

は構成がさらに楷書に傾く。漢人系では晋・楊陽神道(三九九)は四川の石刻で、むしろ隸書であるが、乙脚・波発・趯勢などに楷書要素が見える。晋の年号をもつ爨宝子碑(四〇五)は雲南の爨族の紀念碑であるという特殊条件にかかわらず、同じ段階にある。

### e・宋・持世經

漢人系の墨書では三四六年頃の張超濟文書を最後として、一世紀の空白時代があらわれる。この空白を破って、宋・元嘉廿六年(四四九)、丹陽郡人張休祖によって書かれた持世經第一跋(吐魯番出土・書道博物館)があらわれる。これは今までに見なかつた純然たる、しかも完成した楷書である。(1)横画の三過折、(2)波発、(3)趯勢、(4)転折等の完備、(5)美事な力の均衡によって、右肩上り前のめりにきづかれた構成は間然する所なき楷書である。

張超濟の原始楷書はあまりに幼稚だが、この經の完成度はまたあまりに高い。しかし漢人以外の秦涼の進歩を考えれば、張文書に見る技術が、百年の間に、この經の水準に達し得ることは想像に難くない。楷書の成立はこの百年の或る時期にあつたと考えてさし支えない。

この後、齊・觀普賢經(四八三・書道博物館)、梁・摩訶般若波羅蜜經(五二二・同上)、金剛般若波羅蜜經(五三三・同上)などによって齊・梁間の楷書の進歩を見ることが出来る。

### III・楷書成立の背景

楷書成立の背景として、四・五世紀の書道思潮における知性の優位ということを考える。王羲之父子に関する史

実、および書論の傾向の二面をあげようと思う。

a・二王の相違とその流行

晋・王羲之（三〇七～三六五、魯一同年譜）とその子献之（三四四～三八八）は四世紀後半の書道界最高の水準である。羲之の遺作中、晩年期と考えられる喪乱帖<sup>①</sup>および孔侍中帖によれば、洗練された、感覚的な鋭い筆に、吹きあがる情懷を強くはたらかせて、文字構成における建築的な均衡を無視している。献之の書は、たとえば廿九日帖の手堅い行書では、明快な筆の転換に、理知的な構成力を示し、連綿勢の多い鴨頭丸帖では、骨法的なものを沈めて流暢さを強く出す。

献之の書について宋・明帝の文章志に「変右年法為今体、字画秀媚、妙絶時倫」という。父とちがう「今体」とは、廿九日帖における知性的傾向をいうのであろう。唐・張懷瓘の書估に「峻險高深、起自此子、」というのも同じ意味で、峻險高深とはさわやかな筆の転換を意味するのであろう。また文章志に字画秀媚というが、宋・羊欣の古來能書人名には「骨勢不及父、而媚趣過之」という。秀媚は技法の洗練に伴うもので、鴨頭丸の聯綿性すなわちこれであらう。

この献之の父とちがう新しい様式は、晋宋の間しだいに世にむかえられて、宋の羊欣以後、羲之でなく献之を學んだという能書家は十数人に上り、宋齊の間は羲之は喜ばれず、献之が重んぜられたという事実がある。楷書成立の背景の一面を示すものである。

b・宋齊梁の書論の發生と特質



今に伝わる書論には秦から東晋にわたる著作というものがあるが、多くは偽託である。多くの書論は宋に始まり、齊・梁と盛んになる。書論の發生自体、批判精神の興起を示す。もう少し具体的に説明しよう。

宋・羊欣（三七〇～四四二）の「古來能書人名」は秦—晋の七十人をあげ、籍貫・氏名・官職・得意の書をあげ、時にその系統や佚事を記し、うち十五人に評語を加える。宋・王愔の「古今文字志」には、書体三十六種の名と、秦—晋の一七人の名をあげる。唐時、張彥遠の法書要録編纂時には本文は逸したというが、世説新語の棲逸篇注にひく文字志の李廩伝を見ると、やはり評語がついていたのであろう。齊・王僧虔（四二六～四八五）の「論書」には漢—六朝の三十六人をあげ、人名・事歴佚事・品評が列記される。梁・袁昂（四六一—五四〇）の「古今書評」（五二三年撰）は漢—六朝の二十五人をあげ、一々品評を加えている。梁・庾肩吾（四八七～五五一）の「書品」は漢—六朝の一二三人を、上中下の三等、各等また上中下の三類、すべて九等に分類し、下等（上中下）を除く六類六十五人には各人に短評を加える。書論の發生自体が新しい事件だが、その上こうした評語まで加えるという、この批評精神は注目すべきである。また彼と同時の梁・武帝（四六四～五四九）と陶宏景（四五二～五三六）との間に交わされた書を中心とする問答があるが、中で武帝の第二書は、書の表現と技法との関係をこまかく説いて、技の極、「生氣」の表現を完成することを理想とする。これは中国の書道思想上はじめての古典主義の自覚である。こうした批評精神の展開が、楷書成立の背景にはあったのである。

当時のこの傾向は書道のみではなかった。絵画には、齊・謝赫の古画品録があらわれて、六法を説き、廿七人を六等に分けて品評し、文字では、声韻に齊・周顥（～四八五）の四声切韻、梁・沈約（四四一～五一三）の四声譜があ

らわれ、詩評に梁・鍾嶸（四六九～五一八）の詩品があり、文論に梁・劉勰（四六五？～五二〇？）の文心彫竜があり、詩文集に梁・蕭統（五〇一～五三二）の文選がある。四～六世紀における新しい知性の発展は文化史上の大きな事実であった。

—注—

- ①西川・李柏書稿年代考 東京教育大学教育学部紀要第八卷  
（昭和三八年三月）
- ②西川・焉耆の書派 書品一七二号（昭和四一年七月）

- ③西川・西涼写十誦比丘戒本 書品一六〇号（昭和四〇年五月）
- ④西川・喪乱帖年代考 田山方南還曆記念論集（昭和三八年一〇月）

### 「高昌国とその周辺」

嶋崎 昌

トウルファン盆地には漢代より車師前王国であり、その北方には車師後王国があったが、晋ごろから後王国は姿を消し、前王国のみが車師国として存続する。やがて、五胡十六国の騒乱期に、河西におこった前涼・後涼・西涼・北涼、さらに前涼を滅ぼして河西を占めた前秦が、いずれもトウルファン盆地に高昌郡を経営した。その郡治は盆地のやや東北よりに位する、漢代の高昌壁の後身である高昌城におかれ、盆地西北の交河城を都とする車師国は、高昌郡に圧迫をこうむりながらも余喘をたもっていた。この間、高昌郡にはしだいに河西方面より漢人の流入者を加えることになった。しかるところ、匈奴出身の北涼が北魏の滅ぼすところとなり、この国の残党、沮渠無諱・安周の兄弟は、四四二年高昌城に拠り、河西政権をつぎ、四五〇年沮渠安周は車師国を滅ぼし、盆地一円を支配する。これが

沮渠氏の高昌国であるが、この国は当初から蠕蠕の支配を強くこうむり、四六〇年には蠕蠕は安周を殺し、漢人の闕氏を王とした。これから高昌国には漢人王が相つぐことになる。一方、蠕蠕の配下にあった高車が独立して高昌に勢力を及ぼすに至り、敦煌人の張孟明を立てて高昌王とした。しかし、これが国人に殺されたので馬儒を王とした。ところが、馬儒の時、蠕蠕が再び支配力を高昌に及ぼし、その立場が苦しくなったらしく、北魏に内徙を求めたが成功せず、国内にはクーデタがおこり、馬儒の右長史麴嘉が立って王となった(四九八)。これより麴氏高昌国がおこり、凡そ百四十年存続することになる。麴氏の王統は、



と見られ、佚名王を加え九代となる。嘉ははじめ蠕蠕に臣属したが、やがて再び高車が高昌に勢を加えるに至り、去就に迷い、北魏に内付を乞うこと再三に及んだ。しかし、北魏のいれるところとならず終ったが、やがて蠕蠕の配下にあった突厥が、五四六年高車を支配して独立するや、直ちに高昌に勢力を伸ばした。これは第三代王堅の治世の末期のことと考えられる。麴堅ははじめ北魏に通じたが、北魏が東西兩魏に分裂して華北が混乱すると、南朝の梁に通ずる。その後、北周の初期に第六代王宝茂がこれに通じて以来、中国との交渉は全くとだえ、突厥西面可汗さらに西突厥の勢下に没入し、第七代王乾固の名さえ中国史書には伝わらない。中国と再び交渉をもつのは、第八代王伯雅に至って、南北朝を統一した隋が西方に進出することになってからである。麴伯雅は、西突厥に代って、一時優勢となった鉄勒の支配下にあったが、煬帝治下の隋に入朝し、高句麗遠征にも従軍してその勢威に接し、さらに公主に尚

せられ、隋を景仰してやまず、帰国後国内に一般化していた弁髪左衽のチュルク風俗を一掃する漢化運動を展開する。しかし、支配勢力の鉄勒をはばかり、ついにその運動は実を結ばずに終わった。魏氏高昌国の最後の王魏文泰は、鉄勒をしりぞけ勢を回復した西突厥に服し、新興の唐に対抗し、六四〇年唐の征討をこうむり滅亡する。

このように、高昌国は国初以来、北方民族の間断なき支配をうけ、ことに高車・突厥・鉄勒などのチュルク系民族の配下にあることが久しきに及んだので、この国の支配層を形成していた漢人の間にもチュルク風俗が一般化し、魏伯雅は突厥風俗たる嫂婚制を強制され、つぎの魏文泰もこれに従っていた。

とはいえ、この国の支配者は、沮渠氏を除いてすべて漢人であり、匈奴出身の沮渠氏とても河西に拠ること久しく、準漢人であったし、この国の支配層は流入漢人によって形成されていたのである。そのため、儒学をはじめ中国文化が行なわれ、中国式の年号が称せられ、中国的官制が施行され、漢人植民王国といえるのである。この国の中国式官制はまたそれなりに独自の面があり、それがこの国の性格を極めてよく反映しているといえる。

魏氏以前の高昌国の官制は余り明かではないが、魏氏高昌国の官制は大略判明している。この国の官制については、史書の中、周書高昌伝が最も詳しいが、これとても極めて不備で到底その全貌を伝えるものではない。しかるに、トゥルファン盆地からは近年各種の新資料が出土し、その中、はからずも官制一般に対する示唆を受ける記事のある寧朔將軍魏斌造寺碑（五五五年の年紀をもつ）や死者生前の官歴の見える墓表類などにより史書の不備を大中に補いうるようになったのである。

魏氏高昌国の中央官制は、令尹（宰相）（世子が任ずる）の下に綰曹郎中があり、兵・庫・民・倉・祀・主客・都

官の七部を統べ、各部には長史・司馬・參軍・主簿が置かれた。地方には郡県制が施かれ（高昌郡以来のもの）、太守・令以下が配置されたほか、王子に授けられる二爵、交河公・田地公があり、交河・田地両城にその府が開かれていた（両城には交河郡・田地郡の郡治も存在した）。以上は官制の中核であるが、こうした官制は第三代王堅のころまでに成立し、暫時存続したものと考えられる。

さて、漢代以来、州官系の行政官とは別系統の府官が存在した。これは王・公・將軍らの開く府の官で、長史・司馬以下の幕僚であり、いわば家子郎党的存在であった。府官は魏晉南北朝を通じて發達の一途を辿り、ついに隋に及んで州官にとって代るに至る。また將軍号は西晉から単に名譽の称号として加官されることがおこり、東晉以後は郡の太守もこれを帯び、將軍号の乱発がおこり、雜号・小号といわれるものまで多数の將軍号があらわれた。

麴氏高昌国の中央官制における各部の長史以下は府官系のものである。しかし、府の長官たる長史は一人か二人を通例とし、七部に長史以下を置くのは異例のことである。これは府官系の官制でありながら、これを拡大して独立国の政務を管掌する形をもたしめたものと見られる。府官系官制は馬儒時代にすでに見られ、左右長史があり（麴嘉はその右長史）、司馬が存したことが分っているが、あるいはこれは沮渠氏以来のものかも知れない。また、中国内地にあらわれた傾向である將軍号の乱発が見られ、県の小官もこれを帯び、本官なく將軍号のみのものも存する。麴氏高昌国の將軍号は少数のものを除き、北魏の將軍号に含まれ、その序列は北魏將軍号の官品順に一致し、麴氏高昌の將軍号は北魏のそれに由来し、北魏の將軍号に含まれていないものは、後世設けられたものと考えられる。

さらに、麴氏高昌の王は、第七代乾固に至るまで北魏の官爵を帯びていた。第三代王堅は、前二代の官爵「平西将

軍、開国伯（正三品）より進められて「驃騎大將軍（従一品）、開国公（正一品）」を授けられるに至っている。初代の麴嘉は蠕蠕に従っていたところ、高車の勢力をこうむり、苦境に立ち、北魏に内徙を乞うこと再三に及んでいるが、その後も高車の高圧下におかれ、麴堅の時代に北魏が東西に分裂するまで北魏依存の姿勢はとられ続けたものと察せられ、高昌が北魏対策になみなみならぬ考慮を払ったことは想像に難くない。その故に高昌は北魏の秩序下にあって調整され、堅の「驃騎大將軍、開国公」の府の格式を逸脱しない形がとられるに至ったものと見られる。かくて高昌の將軍号も王の驃騎大將軍以下の北魏將軍号を用いることになったと察せられる。この官制は、北魏が史上より姿を消した後も、第七代王乾固が堅以来の北魏官爵をそのまま踏襲しているところから、この時代まで存続したのではあるまいか。しかし、麴氏高昌の官制は少なくとも一度は大改革を加えられたことがあり、従来存在しなかった吏部が設けられ、中央の各部の長史は郎中に、司馬は侍郎に代ることになったものの如くであるが、これは隋に入朝して「左光祿大夫、車師太守、弃国公」に封ぜられ、漢化運動をおこした第八代王伯雅の改革かと思われる。

吏部は官吏の任命・進退を司るもので中国官制上不可欠のものであるが、従来の高昌官制にこれが存在しないことは問題である。これに関して注目すべきことは、周書高昌伝に見える「大事は王に決し、小事は世子及び二公（交河公・田地公）状に随い断決す。平章録記し、事訖れば即ち除く。籍書の外、久しく文按を掌ること無し。官人列位有り」と雖も、並びに曹府無し。唯毎旦牙門に集り、衆事を評議す」という記事である。この記事は一見不可解の如くでもあるが、高昌の政治はかくの如きものであって、麴氏王家が独裁し、官制はあれども名目的乃至は裝飾的なもので

機能を發揮することもなかったと思われる。高昌国は南北朝の門閥繁栄時代に国をなし、中国内地の影響はこの漢人植民王国にも直接及び、世族・閥族が王家をとりまいていたが、王家はこれらに対し家格に応じて官位や將軍号を授け、その名譽心を満足せしめていたに過ぎず、吏部の要もなかったと見られる。

この麴氏王家独裁制を支えていたものは、この国を支配する北方民族であつたと思われる。高昌国は当初政權がめまぐるしく變転したが、これは入れかわりこの国に勢力を及ぼした北方民族がその支配に好都合な政權を欲したからである。北方民族がこの国を常に支配したのは、主としてこの国を通る西域商胡に課税して得られる莫大な収益を目的としたものであつて、その目的を効果的に且つ簡便に達成する方法は王家をして国内に対し独裁權を振わしめ、彼らの収奪の代行者たらしめることであり、その目的にそう限りについて王家は彼らから庇護をうけたのである。麴氏王家はこうした北方支配勢力の意向に忠実に従い、その庇護をえて百四十年の王統を維持することができたと考えられる。

### 「律令学における私の立場」

曾我部静雄

律令は中国に生れた国家統治の基本法であつて、これを律と令とに分けるのが、その特徴とするところである。律が刑罰典であるに對して、令は非刑罰的な行政法典をなしていた。これ等律令は法家の手によって造られたものであるが、その律令の中でも、律の方が先に生れ、令が後から生れた。律令という名称も、周の戦国時代に既に出来上つ

ていた。しかしその頃はまだ令は独立して居らず、律の従属的な存在であつて、必要な時に出される単行法に過ぎず、その内容も刑罰的のものもあり、また非刑罰的のものもあつて、一定してはいなかつた。それが漢の武帝の時に至つて、儒教を以て国教と定めたことから、その影響をうけて、律と令との分離が行われるようになり、また律令の性格にも変化が起つて来た。

既に述べた如く、律令は法家の手によつて造られたものであるから、その内容が法家的であるは、論を俟たない。また春秋・戦国及び秦の時代は、戦乱覇道的な時代であつたから、法家的な律令がこのような時代及び国家にはよく適合したのである。しかし漢が建国されてからは、世は太平となり、第五代武帝の頃になると、漢としての国是を定める必要を感じるようになって、ここに武帝は董仲舒の献議を納れて、儒教を以て国教と定めたのである。儒教を国教とした以上は、国家の諸政策は、悉く儒教に立脚しなければならなくなるのであるが、小島祐馬先生は、この間の情勢をば、その著『古代支那研究』に収めてある論文「支那の学問の固定性と漢代以後の社会」において、「儒家の經典は漢の武帝の時に然りし如く、それ以後においても依然として支那社会の政治上の根本法典であつた。すべて国家の制度法規は、此の根本法典から流出するのである」と論ぜられている。この小島先生の論断の如く、前漢の武帝の時から、中国の制度法規は、儒教より流れ出ずることとなつたが、これによつて、国家の制度法規が、急激に変化したかというに、そこは保守主義の国であるから、徐々に儒教へと変化して行つたのである。かくして後漢及び三国を経て晋に至つて、ここに儒教化が完全に実現したのである。晋の律令の編纂者であり、晋の律令の註解をも造つた人である杜預の奏事の一節が、我が養老の官位令の集解の「或云」に引用されているが、それは



古之刑書、銘之鍾鼎、鑄之金石、斯所下以塞異端、絕異理也、凡令以教諭為宗、律以懲正為本、此二法雖前後異時、並以仁為旨也、

というものであつて、これは晋の律令の性格を、その律令の編纂者自身が明らかにした言葉である。最後の所の「此二法雖前後異時、並以仁為旨也」とあるのがそれであつて、二法即ち律と令の二つの法は、その成立年代が異なるが、二つともに儒教の最高道徳であり、儒教の根本原理である仁を以て本旨としているのである。これは晋の律令というものは、儒教に拠つて造られているを明らかにしているものに他ならず、晋の律令に至つてここに完全に儒教的になりつたことを示しているに他ならない。然らば儒教の經典の中で法制的なものは何かと言へば、それは周礼であり、礼記の王制篇である。道徳上の礼も、国家の法律制度も、共に人間の行動を束縛するものであるから、儒教の經典では、これを一緒にして礼の範疇に入れていた。市村瓚次郎先生が、その著『東洋史統』巻一において、「周初の礼は社会の秩序を整へる機関を総称したもので、その範圍は極めて広く、普通の礼儀は勿論、制度法律もその中に含まれて居つた」と述べられているのは至言である。

周礼は周の制度を伝えているものとなつてゐるが、恐らく戦国の頃に儒家の手によつて、周の時に行われていた制度に、彼等の理想とする制度を加えて作られたものであろう。これは天・地・春・夏・秋・冬の六官篇から出来てゐるが、その秋官篇が刑罰典である以外の残りの五官篇は、全て非刑罰的な民法法典である。このように刑罰典と非刑罰典とが截然と分れてゐる法典に準拠して、晋の律令は編纂されたのであるから、晋の律令は従つて周礼と同様に、刑罰と非刑罰の部分が截然と區別されてゐたのであつて、ここに刑罰的な律と非刑罰的な令との區別が、晋の律令に

おいて初めて出来上ったわけである。上掲の杜預の奏事にも「凡令以<sub>レ</sub>教諭<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>宗、律以<sub>レ</sub>懲正<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>本」と言つて、律と令の相違を明らかにしているが、中田薫先生が法制史研究第三冊に載せた論文「律令法系の発達についての補考」において、「漢の令典は律典の補助的副法である。（中略）律を純然たる刑書に還元し、律の副法たる令を律より分離独立せしめて、非刑罰的純行政法規に改造したものは実に晋であつた」と述べられているのは、このような事情を論断されたものである。

晋以後においても、いずれの国家も儒教を以て国是としたことには変りはなく、従つて律令も亦晋の律令を継承したものであつて、晋の律令は北朝では北魏がこれを承けて、東魏・北齊と西魏・北周とに及ぼし、次の隋は主として北齊の律令を承けて唐に及ぼし、その唐において中国の律令は完成されたのである。

このように見て来るならば、中国の漢以後の律令は、周礼を離れては論ずることは出来ないものである。礼記の王制篇も律令には採り入れられているが、その量は周礼に比すると非常に少ない。私はこのような理由で、私の律令についての研究には、常に周礼を座右に置いて離さず、周礼の本文、並びにその註及び疏の意味を汲んで、律令を説いているのである。律令の研究が周礼を離れて出来ないことは、私は昭和四年頃に狩野直喜先生から教えられていたのであるが、周礼によつて日中の律令を研究した人に、水戸の学者・藤田幽谷がある。彼の律令についての学説は、その著『勸農或問』によつて窺うことが出来るが、彼が周礼を好んだことは、彼の弟子の会沢正志斎の『幽谷遺範』に、「先生好読<sub>レ</sub>周官、謂、聖人經<sub>レ</sub>緯天地、綱<sub>レ</sub>紀国家、悉備<sub>レ</sub>於此書、其所<sub>レ</sub>發明、大抵前賢所<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>發」とあるによつて判るのである。この最後の所に「その發明するところは、大抵前賢の未だ発せざるところなり」と評しているよう

に、幽谷の律令についての学説は、徳川時代の学者達の説とは、大いに異なるものであったのである。

「十一・二世紀におけるモンゴル部族社会の構造」

村上正二

1

十・一二世紀すなわちチンギス汗勃興以前のモンゴル部族社会の構造は、どのようなものであったか、そののち勃興してくるチンギス汗帝国の成立の秘密をさぐる一つの手だてとして、この問題を取り上げてみたいと思う。まず、当時のモンゴル高原における一般的情勢をみると、高原内の良好な草原地帯には、固有の名称をもち、強力な統率者の下にそれぞれ一定の領域を占拠して、高原全域の政治的ヘゲモニーをめぐって対立抗争し、いくつかの遊牧民の諸集団があった。これらの集団を当時のモンゴル語の文献では、「イルゲン」(Igen)と呼び、西方のイスラム文献では、「カウム」(Qaum)とか、その複数形の「アクワーム」(aqwam)というふう呼んだ。元朝秘史に、モンゴル・イルゲンを始めとして、タタール・イルゲン、メルキト・イルゲン、ケレイト・イルゲン、ナイマン・イルゲン、オングト・イルゲンなどとみえ、ラシイード・ウツダイーンの「集史」に、カウム・タタール、カウム・メルキトなどとみえるものが、それである。

ところで、この諸集団の内部構造はどうかというと、これまた「イルゲン」とか「カウム」と呼ばれて、同様に固有の名をもち、各統率者の下に一定の領域を占拠支配する諸分族集団にわかれていた。例えば、タタール・イルゲン

はアルチ・タタールとかチャガン・タタールなどという六つの分族Ⅱイルゲンに、メルキト・イルゲンは、ウドイト・メルキトとかウハス・メルキトなどという三つの分族Ⅲイルゲンに、それぞれわかれていた。その場合、これら分族Ⅲイルゲンは右の例にもみられるように、その所属する大きいイルゲン集団の名を自己の固有の名の下に加えて、相互に区別し合っていたが、しかも同じく自己の集団を「イルゲン」あるいは「カウム」とそれぞれ呼んでいたことから察せられるように、それ自身が一箇の独立した「ウルス」という政治的組織体をつくって、その所属するイルゲン全体に自己の支配権を推し及ぼそうと互いに競い合っていた。そして、これら分族Ⅲイルゲンの長すなわち「ウルスの長」(Ulsun ejen)はいずれも「汗」を称していたようである。しかし、これらの汗のうち、絶対的に優越する者が出ないときは、比較的人望のある汗が推戴されてその全体の統轄者になったようで、タタール、メルキト・イルゲンの場合がそうであった。しかし、ケレイト、ナイマン・イルゲンのように、すでに特定の分族Ⅲイルゲンの勢力が圧倒的に強く、そのイルゲン全体の支配権を独占し、世襲して、一種、部族王国とでもいべき体制をとっていた場合もあった。かようにイルゲンによって多少の差はあったものの、これを一般的にいうなら、当時のモンゴル高原の諸部族集団は、分族Ⅲイルゲンが構成する政治組織体としての諸ウルスからなる、そのゆるやかな政治的連合体をなしていたものといってもよからうと思う。

## 2

つぎに、このような遊牧民イルゲン集団内部の社会組織面はどうなっていたであろうか。これを主とした豊富な史料を伝えるモンゴル・イルゲンの場合について説いてみることにする。周知の如く、モンゴル・イルゲンは「蒼い狼」

と「白い牝鹿」というトーテム的野獣を始祖とするもので、このイルゲンに属する成員は何らかの意味で、その始祖の父系子孫につながるものであり、系譜上、そのいずれかの節目から出た人物の血統に属するという信念をいだいていた。従って、そこには、つねに始祖からチンギス汗時代にいたるまでの長い詳しい系譜がつくられ、伝えられて来たのであって、すべての成員ならびにその成員を包む父系血縁集団は、その尨大で複雑な系譜的体系のどこかに必ず組み込まれているはずであった。いいかえるならば、モンゴル・インゲルの社会的構造の発展の歴史は、この系譜体系のなかに凝集していたともいえるであろう。

モンゴル・イルゲン全体の系譜的体系は大きく二つの部分にわかれる。一つは原住地に生じたという「狼と鹿」という始祖から直接誕生したとされる父系子孫の系譜とそのち移住地において「天の光」をうけて妊娠した女性から出たとされるものの子孫の系譜とである。前者は恐らく原住地におけるモンゴル・イルゲンの古い諸分族の歴史を物語るものであろうが、詳細なことは遺憾ながら不明である。後者の系譜こそは、移住地に来たのちの諸分族の歴史を物語るもので、それらは秘史やラシードにみえる多くの挿話とも相俟って、ある程度はその歴史的過程を追求することができそうである。それによると、「天の光」をうけて生まれたという三人の兄弟の名は、ヤタギン、サルジュウト、ポドンチャルで、それぞれその名をとった「オボフ」(Обоф)の創設者となったという。「オボフ」とは父系血縁集団が分岐独立した際による、その「固有の名」をいうもので、日本語でいうなら、さしずめ「氏」に当るものでもあろうか。この三つの兄弟の子孫のうち、当時の文献は、もっぱらチンギス汗の系統の始祖となったとする末子のポドンチャルのボルジギン・オボフの系譜を詳細に辿って、それから各時代たえず分岐独立して行った多くの「オボ

フ、さらに、その分岐した「オボフ」から再分岐して生じた「オボフ」の名称の由来や歴史についていろいろ伝えてくれる。それらを調べてみると、チンギス汗の当時、名の知られている「オボフ」の数だけでも、三十から四十に上っている。また、殆ど、詳しいことの伝えられていないカタギン、サルジュウトの子孫から分岐発展した「オボフ」も、当然のことながらかなりの数に上ったことであろう。こうして、モンゴル・イルゲンはチンギス汗勃興当初すでに、それぞれ固有の「氏」<sup>オボフ</sup>をもつ、きわめて多くの——全体で恐らく百以上にも上ったろうか——小さい父系血縁集団にわれていたことがわかるのである。

このような数多くの父系血縁集団は、当時はその創設者を祖としてせいぜい二三世代から四五世代までの核家族を含む拡大家族(Extended Family)であったようで、七世代以上のものはきわめて稀であり、ふつう五世代以上となれば、その大きくなった血縁集団は、遊牧経営の諸条件からみても不利益となるので、自然遠縁の部分から分裂して、新しい血縁集団をつくっていった。その際、新しい血縁集団は旧い集団から一定の牧地と畜群とを分与されるのがつねであって、従って、新しい血縁集団は、それ自体また新しい遊牧経営の単位となったのである。かように、「オボフ」は父系血縁集団であると同時に、遊牧社会における生産消費の基礎単位をなすものであったことに注意したいと思う。

ところで、新しく分岐独立したオボフ集団は、自己が直接に分岐した、いわば親オボフ集団との間の系譜的關係を熟知していたし、そうした關係を通じて、同一の集団から分かれ出た親近のオボフ集団との間におのずから親密な同族的關係も生じていた。そのような個々の系譜關係をおしすすめることによって、小さい父系血縁集団は、旧いモン

ゴル族を構成していたという伝承上の各血縁集団にまで結びつくことができたのであり、そしてまた、モンゴル・イルゲンの族祖たる「蒼い狼」や「白い牝鹿」にまでも結びつくことができるかと観念されたのであった。

かような遊牧社会の基礎的血縁集団としての「オボフ」集団をいくつかの大きい、もとの族集団にまで結びつける系譜の関係およびそれによって辿られるところの父子孫全体を含めて、それらをモンゴル語では「ウルフ」(Uruk)と呼んだ。これには系譜の辿らせ方によって大小の差が生ずるが、現実的にもっとも有効で強力な「ウルフ」の関係は最終的に分岐したオボフ相互間のもので、これらの集団が、それぞれ緊密で強力な協力関係を取り結んで、政治的に活躍することが多かった。つまり、「ウルフ」の関係は、当時のモンゴル遊牧社会の基礎的血縁集団であり、かつ基礎的生産の単位として、それ自体小さくわかれ、従って微弱な社会単位でもあったオボフ集団をば政治的に大きく結束させるものとして働いたのである。かようにして、当時のモンゴル社会には、その大小強弱を問わず、各オボフ間には、自己保存のためにもそれらを相互に結びつけ合うウルフ的關係が随処に見受けられたのである。こうしたウルフ結合体の分離結合こそが、当時のモンゴル遊牧社会の政治の實際を動かしたものであったろうと推論される。

#### 4

さて、チンギス汗勃興直前のモンゴル・ウルスsoの政治的組織はどうであったか、これを右の社会組織に関する説明に結びつけて、多少の結論を見出してみたい。チンギス汗勃興以前のモンゴル・イルゲン内の政治的組織については、ラシード・ウッディーンの記事が、不完全ながらもある程度の説明を与えてくれる。それによると、当時のモンゴル・ウルスは、左翼と中翼と右翼の三翼にわかれており、左翼はタイチウトという強力なオボフ集団の長老カダ

ン・タイシを統率者と仰ぐタイチウト・ウルフの結合体であり、中翼はキヤトという、これまたタイチウトの親族で、これと拮抗し合う勢力をもつオボフ集団の長老クトラ汗を統率者と仰ぐキヤト・ウルフの結合体であり、右翼は推定するところ、恐らくはオンギラット・オボフ出身のアダル汗を統率者と仰ぐオンギラット・ウルスの結合体であったという。そして、これら各翼においては、各自の指導者の下に、その配下のオボフの長たちによって開催される「クリルタイ」という政治的集会の制があつて、各翼に関する政治的重要事は、すべてこの「クリルタイ」で決定されてきた。にも拘わらず、モンゴル・イルゲン全体の運命にかかわる重大な戦争の際には、中翼のクトラ汗を全体の汗と仰いで、その指導の下に一致行動したものと察せられる。この場合、各翼はそれぞれ独立の政治的組織体すなわち前述の「ウルス」をなしていたことは明らかで、これらが例えばタタール・イルゲンではマルチ・タタール、チャガン・タタールなどの六つの分族<sub>イルゲン</sub>のつくる諸ウルスからなつてゐるというのと同じく、モンゴル・イルゲンもまた、これら分族<sub>イルゲン</sub>のつくる三つの「ウルス」の連合体に外ならなかつたのである。

かようにして、モンゴルとかタタールとかナイマンなどといわれたイルゲン集団は、大体において族祖伝承や移住伝承を共通にする族集団として、「部族」などと呼んでもよいものであろうが、それらの部族の族祖から系譜的に細かくわかれ出た小さい父系血縁集団は、この部族集団内部の最小の基礎的血縁集団であるとともに、また遊牧生産の基礎単位として、いわば「氏」<sub>ウジ</sub>「集団をなしたものであり、また、これら「氏」<sub>ウジ</sub>「集団をそれぞれの細かい系譜関係を辿つて結束した「ウルフ」<sub>ウルフ</sub>「的結合体は、「姓」<sub>ウジネ</sub>「的存在といつてもよいものではなからうかと、著者は思料する。そして、この「ウルフ」の構造こそ、当時のモンゴル部族制社会の性格を説明する鍵を握るものとして、一層の究明を加



うべき問題と心得える次第である。

### 「南朝梁の官僚層」

越智重明

梁の武帝蕭衍は即位後しばらくたった天監七年（西紀五〇八年）にいわゆる天監の改革を断行した。この改革の目的は大きく分けると二つあったが、その一つとして官僚層の体質改善があげられる。本日とりあげるのはそうした官僚層の体質改善の実態とそのもつ歴史的背景とについてである。

まず、武帝が改革において旧来最下級官僚層であった後門層を官僚層からおし出してしまったことについてであるが、おそくとも西晋の末ごろまでに族門制ともいふべきものが生じている。これは全国の人々をその政治社会身分によつて上下四つの階層に分けるものである。その第一位が甲族層であり、第二位が次門層であり、第三位が後門層であり、第四位が（庶民たる）三五門層である。族門制成立時には後門層も亦一応仲間意識をもつて結ばれる士人層に入っていた。しかしすでに東晋時代後門層は士人層からおし出されてしまっていた。これは東晋宋齊時代最下級官僚層たる後門層が士人層でなくなつてしまつていたのを意味する。（東晋宋齊時代士人の間にある仲間意識は各人の父祖以来の政治的社会的優越性に基いている。こうしたものであるだけに対内的に見た際士人間の仲間意識は甲族層としてのそれと次門層としてのそれとに分れていたといふことができる。）

梁の武帝は改革のとき新たに流内十八班、流外七班という官品制（文官系統の場合）を設け、以後これを官品制の

基本的なものとしている。この流内十八班、流外七班には士人だけが就くべく定められている。流外七班より下に役目としての三品繚位以下が列しているが、これは後門層の就くべきものである。このように見ると武帝は改革において士人層だけを官僚層、唯一の政治的支配者層としたことになる。しかしながらそれは必ずしも武帝が士人層のもつ「伝統」の力に屈服したからである、といったように単純に理解することはできない。この改革はやはり当時の国政運営上の一つの必要性と結びついていたと考えざるをえない。その必要性というのは結局国家の把握する役人（役を負擔すべき人々）の増加を期待するということである。武帝は即位すると直ちに減少していた役人を増加し国家の把握する役量を増加する必要にせまられた。この際武帝がとるべく予想される方策は一応土断を断行することと戸籍偽濫を摘発することとの二つである。（当時三五門層は役を免かれるために、盛んに後門層の就くべき二品勳位以下の品官に就いたり、就いたと偽ったりしていたが、後者が当時の戸籍偽濫の大きい部分を占めていた。）しかし当時の政治社会情勢なり武帝の即位の事情なりは、武帝がこれらの方策を旧来通りのやりかたで強力かつ大規模に推進するのを許さなかった。その故に武帝は後門層の就くべき品官であった二品勳位以下を改めて役目としての三品勳位以下に切りさげ、以て後門層を（広義の）就役者層とすると同時に、（二品勳位以下の品官に就いたり、就いたと偽ったりすることによって）役を免かれていた多数の三五門層出身者を自動的に役の対象者とするやりかたをとったと考えられる。（このやりかたは新しい戸籍偽濫対策たる一面をもつ。）

つぎに、武帝が改革において上層の次門層を甲族層と同質的な政治的支配者層に指定したことについてであるが、改革以前二品という言葉は（最高の）政治的支配者層としての甲族層なりその就くべき官なりを指していた。改革以

後二品（二流内十八班）の語は甲族層と上層の次門層の就くべき官を指すようになった。これは武帝が上層の次門層を中族層と同質的な（最高の）政治的支配者層としようとしたのを示している。

武帝が改革にあたってとくに上層の次門層を重視しそれに（最高の）政治的支配者層としての地位を与えた歴史的背景としては、つぎの三つの点が考えられる。第一は、甲族層が政治身分の固定化に安んじ官僚として無能化していたけれども、次門層とくにその上層部がそれに比べた際政治担当力・事務処理能力をもっていたことである。第二は、その即位までの過程において武帝と一部上層の次門層との間に特殊な結びつきがあり、かつそうした人々が改革ごろの武帝政権において枢要な地位を占めていたことである。武帝はもともと雍州州鎮の長官としての実力によって梁王朝を建てた人物である。彼は雍州に赴任して以来虎視眈々として挙兵の機をねらっていたが、そうした彼をたすけ、本来州鎮のもっている自律的独立的性格を充実したのは、ごく僅かの例外を除くと雍州などの上層の次門層出身の人々であった。彼らは官僚として概ね有能であり、彼の挙兵時にあっても梁王朝の前期にあってもその権力の中枢にあつて大いに活躍している。なお、雍州在任中彼は軍事面で荊州州鎮の長官の支配を受けていたが、その挙兵時荊州州鎮の長官はかえって彼に従い、それにつれて荊州州鎮のもつ軍事力が彼の傘下に入るようになった。（首都建康に入るまでの彼の軍事力の基幹は雍州の軍事力を主とし荊州の軍事力を副とする。）荊州州鎮のそうした動向を事実上決定した荊州要官の殆んどすべては雍州などの上層の次門層出身者であった。また、首都建康に入った彼を迎えて受禪の実現に努力したのは沈約、范雲の兩名であり、改革に人事を掌る吏部尚書として大きい役割を果たしたのは徐勉であるが、この三名も亦上層の次門層出身者である。また、武帝の家ももともと上層の次門の出であつたと考えられ

る。第三は、改革時うちだされた役人増加策に対する後門層、(富裕な)三五門層の抵抗をおさえ得る力が次門層とくに上層の次門層にしかなかったことである。九品官人法が始めて設けられたころ甲族層の前身である上級の士人層はいわゆる在地豪族的性格を強くもっており、本貫にある郷党、宗人との連繋も強かったと考えられる。しかし魏中期州大中正の制が設けられてから上級の士人層 $\parallel$ 甲族層は次第にその本貫をかけている郷村社会と無縁となった。とくに南朝に入ってから甲族層は中央要官を独占することに満足し、地方官界、郷村社会をおさえその動きに主動性をもつといったことは殆んどなかった。一方、次門層は甲族層が中央官界の要官を独占するにつれ、専ら地方官界や軍府で活躍するようになった。もともと彼らは地方官界に大きい勢力をもちかつ郷村社会の動向に主導性をもっていたが、かくてその傾向は一段と強化されてきたと考えられる。ところで、後門層、(富裕な)三五門層も亦それなりに往々地方官界、郷村社会の有力者層であった。改革にあつてはそれらの抵抗をおさえる必要があるが、そのためには地方官界、郷村社会においてそれよりも大きい力をもつ階層の協力を必要とする。しかし(一部の特別なものを除くと)甲族層はその期待に応える力をもっていない。それだけに武帝は次門層とくに上層の次門層が地方官界、郷村社会にもつ力にたよらざるをえなかったと推測される。

さて、武帝は改革にあたり上層の次門層の就くべき官を(起家の官から極官に至るまで)すべて二品 $\parallel$ 流内十八班に含めただけでなく、さらに進んで彼らを盛んに制度面で甲族とし、しかもその甲族たることがその子孫に及ぶような配慮をしている。これはそれらが旧来の甲族層によってその仲間入りを認められるのを期待するものである。こうしたことは武帝が長い時間をかけて甲族層そのものの體質を改善し、それを若返らせようとしたのを意味する。

ところで、族門制成立期にあつては、各人が甲族・次門・後門・三五門のどれに属するかということはそれぞれ実態に即したものであつた筈である。しかし一旦族門制が制度化されてしまうと、各族、各門は彼らの生活感情、仲間意識に基づく機能をもつと同時に制度自体からの作用をも受けてくる。南朝に入ると天子によって制度的に甲族が次門とされたり次門が甲族とされたりするが、これはその事例である。(後者の際「新甲族」は通常旧来の甲族層から仲間入りを認められない。)武帝の改革における措置は、一面で右のような天子の族門支配権を一段と強化したものである。しかしそれにしても、それは旧来の甲族層が「新甲族」層の仲間入りも認めることによって始めて最終目的を達成する。ところで、旧来の甲族層が官僚として無能であり一方上層の次門層―「新甲族」層が官僚として有能であること、旧来の甲族層が一種の寄生官僚的性格をもつこと、は梁時代にあつても変りはなかった。それだけに旧来の甲族層は上層の次門層の抬頭に「階層」として内心大きい脅威を感じていたようである。こうした状態であるだけに一般的にいつて旧来の甲族層が「新甲族」層の仲間入りを容認すること、ひいては甲族層そのものの体質を改善することはついに完成しなかつたとすべきである。

なお、全体的に見た際改革以後官僚層は次第に安定性を欠いてきている。それは結局、改革以後再び役人が減少したことから、後門層の広義の庶民への切り下げによって国家権力の基盤が不安定になったことによる。

### 3 研究会 (東洋文庫談話会)

昭和四一年五月三〇日 「侯家荘の殷の台墓について」

京都大学名誉教授 梅原末治

昭和四一年五月三一日 「殷代の彫像」

京都大学名誉教授 梅原末治

昭和四一年六月一八日 「アジア諸民族研究所レニングラード支所について」

中央アジア・イスラム研究室 護 雅夫

昭和四一年七月一六日 「アジア近代化と比較社会構造—東南アジア史を例として—」

南方史研究室 市川健二郎

昭和四一年九月一七日 「満文原檔について」

清代史研究委員会 神田信夫・松村 潤・岡田英弘

昭和四一年一〇月二二日 「チベット古代王朝と唐朝との血縁関係」

チベット研究室 山口 瑞 鳳

昭和四二年二月四日 「明代の大戸について」

神戸大学助手内地研究員 谷口 規 矩 雄

#### 4 展 示 会

第五十二回展示会 昭和四一年一月一二・一三日 於東洋文庫

「欧米人日本語研究書」

今回の展示会は主として十九世紀以前に我が国と接触した欧米の人々の編著を通して外国人が我々の言語を如何に観察し、如何に研究したか、その迹を歴史的に回顧しようとしたものである。この時期の著作は必ずしも、真に言語学的とは云いがたいけれども、その努力の成果は各国における日本語研究の土台となっているもので、いずれも歴史的に記憶されるべきものである。この趣旨により、例えば、ドイツの日本語学者Günther Wenck氏の大著Japanische

Phonetik 四卷（一九五四～一九五九）を始め、戦後におけるアメリカの言語学者たちの著述の類は一切割愛した。

展示した書籍は、本文庫所蔵の原型ないし写真五三点である。欲をいえばきりが無いが、欧米人日本語研究史の鳥瞰は以て可能であろう。なお、若干の品目を参考に番外として加えたが、これは解説目録には登載しなかった。展示書籍の選択及び解題作成の一切は、亀井孝研究員が担当した。

## 5 情報連絡

本年度事業は左記の通りである。

- 一、現存外国東洋学者人名辞典の編纂
- 二、東洋史研究論文目録編集委員会編「日本における東洋史論文目録」索引作成の援助
- 三、欧米各国におけるアジア言語の研究と教授とに関する実態調査結果の整理
- 四、中国考古学研究論文カード作成と整理（一九六六年五月迄、六月以降関係刊行物休刊）
- 五、日本についての外国語文献書誌補充カードの作成
- 六、内外の大学カレンダーの蒐集
- 七、東洋文庫刊行物の欧文要旨作成
- 八、内外の東洋学に関する情報提供、通信連絡
- 九、来日外国入学者への便宜供与

6 図書の収集と閲覧

一、資料の収集及びサービス

選択図書カード 一、〇〇〇枚、

収集図書事務用カード 二、一四四枚、

通信連絡 二八〇件。

資料購入

逐次刊行物 計	区	和漢書	洋書	計
	分	三四七冊 一四四 四九一	四八九冊 五〇八 九九七	八三六冊 六五二 一、四八八
	本			

資料交換

逐次刊行物 計	区	分	受贈		寄贈			
			和漢書	洋書	計	国内	国外	計
			一、九六九冊 一、八九一 三、八六〇 (新聞十種)	八二三冊 九二三 一、七四六	二、七九二冊 二、八一四 五、六〇六	六二三冊 八五一 一、四七四	五二六冊 二、一〇三 二、六二九	一、一四九冊 二、九五四 四、一〇三



特別事業

閲覧用目録カード排列

a 洋書著者名目録

b 洋書地域別分類目録

製本

その 他	複写資料		洋書	和漢書	
	製 帙	製 本		製 帙	製 本
一〇六	三三	四五六	二〇一	二二〇	一〇九

資料複写サービス

写真複写

申込件数

撮影齣数

焼付枚数

四三六件

八九、九〇六齣

八八、五七二枚

ポジ呷数

スライド

リファレンス

一五、二七五呷

四〇枚

五八件

フィルム蒐集 一六部、 焼付蒐集 二〇部。

ゼロックス複写

申込件数 六八二件、 枚数 二六、八九五枚。

二、目録及び整理

a 洋書目録

新収増加図書 分類目録カード 一、〇〇〇部

Periodicals の調査

東洋文庫の基礎となっているモリソン蒐集の雑誌類百二十種と、其後に購入した千三百余种との総合目録を出版するため現物調査を行い、カード目録を作成した。

パンフレット調査

モリソンは百頁未満の印刷物をパンフレットとして特殊扱いをしたが、此のカード目録が完備していないので、とりあえずシナ本部に属するものの整理を始めた。一枚の紙片をも余さずカードを取り始め目下続行中である。

b 和漢書目録室

図書整理 漢籍 六三八部 二、二二七冊 一五九葉

和書 六九二部 一、一八三冊 四七二葉 三軸

和装本及帙題箋 一、一二二枚

c アジア文献目録

1 「西アジア地域総合研究」の為、蒐集せる諸文献中のアラビア語文献約八九〇部の目録カード六、〇〇〇枚、及びオスマン・トルコ語文献約八〇部の目録カード五〇〇枚を謄写印刷により作製した。

2 昭和四十一年度譲受（受贈及購入）等図書三三九冊（一三ヶ国語）の整理、及び目録カード約二、三〇〇枚を謄写作製した。

d 整理

登録 和・漢・洋単行本及逐次刊行物 三、五九五部 六、三三二冊 六一三葉 四軸

目録カード複製

六、九八〇枚

新着書目刊行

新着図書目録 一四号 一九六六年五月刊

洋書速報（国立国会図書館刊） 二三四号～二六〇号（一九六六・四・一～一九六七・三・一五）

三、図書の閲覧及び考査

考査件数

三六一件

閲覧票発行者数

一五五名（二五六四～二七一八）

書庫内書架増設

スチール棚 十三台

月	開館 日数	閲覧者数	一日 平均	昨年同月 との比 (△印は減)	閲覧図書数	一日 平均	昨年同月 との比 (△印は減)
	日	人	人	人	冊	冊	冊
4	24	292	13	45	4,003	167	2,546
5	23	355	16	141	4,539	198	2,041
6	25	323	13	39	5,940	234	1,444
7	25	476	20	68	8,952	359	1,722
8	26	587	23	114	14,395	554	2,065
9	24	447	19	84	6,649	278	919
10	24	441	19	17	8,603	359	3,095
11	21	388	19	△ 113	7,781	372	△ 1,401
12	22	442	21	106	6,118	280	△ 871
1	22	285	13	43	3,467	158	10
2	22	262	12	39	3,555	162	△ 1,208
3	25	296	12	2	7,099	284	3,063
計	283	4,594			81,099		

昭和四一年度 図書閲覧状況

月	和 書		漢 籍		洋 書		合 計	
	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数
4	153	376	422	3,157	235	361	814	4,003
5	225	740	428	3,385	217	414	870	4,539
6	151	480	505	5,100	185	360	841	5,940
7	163	428	999	7,880	282	644	1,444	8,952
8	290	603	1,145	12,559	396	877	1,668	14,395
9	172	261	655	5,013	316	879	1,154	6,649
10	146	302	749	7,771	244	535	1,139	8,603
11	372	821	720	6,452	320	508	1,412	7,781
12	230	709	781	5,099	241	410	1,252	6,118
1	186	564	323	2,476	243	407	572	3,467
2	108	186	352	2,790	243	579	703	3,555
3	116	341	510	6,082	507	656	1,133	7,079

閲覧図書数

内訳

四、特別事業

「東洋文庫洋書目録 定期刊行物」 刊行

「漢籍分類目録集部 東洋文庫之部」 刊行

「特殊文庫マイクロフィルム連合目録」 B5判 三五〇頁(予定) 印刷中

「漢籍分類目録史部 東洋文庫之部」 編集

## 六 研究調査活動

### 1 東洋学連絡委員会

財団法人東洋文庫は、戦前からその研究事業に国際的規模の実績をあげてきており、さらにいま、東洋学研究総合センターとして広範な研究者の共同利用と一般公開性を具え、研究者に対する便宜供与を行い、専門分野に於ける国内及び国際的連絡の中心としての役割を果すことを広く期待されている。従つてその諸事業を、広く全国的組織による東洋学者の総意を反映して運営するため、昭和三十三年より、東洋学に関する主要な研究機関及び研究分野の代表者に依頼して東洋学連絡委員会を組織し、文庫の事業計画に関する助言をうけている。

昭和四十一年度の委員会は左の如く行われた。

春秋（昭和四十一年五月二四日）

報告 昭和四十年研究事業報告

議事 昭和四十一年度研究事業計画について

秋期（昭和四十二年三月二五日）

報告 昭和四十一年度研究事業中間報告

議事 昭和四十二年研究事業計画案について

## 2 特定研究

課題「日本の近代化過程に対する国際的評価とその背景」

研究担当者 榎 一雄

研究協力者 有馬成甫 生田 滋 市古宙三 岩生成一 岩崎富久男 衛藤藩吉 神田信夫 北村 甫 河野六郎

佐々木正哉 鈴木 俊 田川孝三 田中時彦 田中正俊 鳥海 靖 沼田次郎 坂野正高 松村 潤 護 雅夫

安岡昭男 山根幸夫 山本達郎 箭内健次

〔研究目的〕 日本の近代化はアジア史あるいは世界史上からも注目を惹く現象とされるが、その過程は中国・朝鮮をはじめとする東アジア諸国の近代化過程と不可分のかかわりあいをもつ。然るに従来の研究は主として内発的国内過程か外交史的関係に注目するに止り、世界各国特にアジア諸国の近代化との構造的相互連関において理解しようとする試みが不充分であった。東洋文庫は特に次の三点に重点をおいた研究を行う。(1)日本及びアジア諸国の近代化の契機は、十六世紀にはじまり十九世紀に特に顕著となった欧米諸国のアジアへの進出と植民地的支配体制の確立である。アジア諸国はかかる衝撃に対する対決を余儀なくされることよって近代化への契機をつかんだ。従来充分かでないこの欧米の進出過程をアジア史の立場から具体的に究明する。(2)アジア諸国は時期に差こそあれこの欧米の進出に対する対応を契機として様々な過程と態様とを以て、近代化に踏み出した。日本近代化の独自性と特殊性を明かにする比較的研究及び日本の近代化とアジア諸国の近代化との構造的関連を究明する。(3)日本の近代化に対して加えら

れる様々の国際的評価は以上の諸点を照らし出す重要な意味を含むと同時に各国の近代化のそれぞれの段階をふまえている。従って欧米諸国・アジア諸国の評価を比較検討することは各国と我国との段階的相違の把握に有効な作業である。

〔研究経過の概要〕 東洋文庫は、旧開国百年記念事業会収集資料と戦前の欧文日本研究書の蒐集を擁し、ユネスコの国際協力研究「東アジア地域における西洋文明受容の歴史的背景」を担当し、諸大学間の共同利用研究センターとしての役割を果たしてきた。

従来テーマに関連して東洋文庫において出された成果に次の如きものがある。

「欧文日本研究書目」(一九四五～一九六〇)の刊行

“A Selected List of Books on Japan in Western Languages (1945~'60)” (A studies an Asia Abroad I)  
The Information Centre of Asian Studies, 1964. pp. 74. Toyo Bunko.

「東洋文庫所蔵近代日本関係文献分類目録—和漢・マイクロフィルムの部—」第一～第三分冊の刊行 昭和三六～三八年

本特定研究の初年度(昭和四十一年度)においては、主要な研究課題を『近代化の契機としての欧米諸国のアジアへの進出』とし、その研究に必要な欧文の資料および参考図書を集整理した。

### 3 機 関 研 究



課題 「地方志にもとづく中国社会の研究」

研究代表者 田川孝三

研究分担者 (書誌的調査並びに目録の作成) 田川孝三 榎 一雄 青山定雄 藤枝 晃 宇都木章 (近世中国

における鄉村支配層の存在形態に関する研究) 市古宙三 田中正俊 佐々木正哉 神田信夫 松村 潤 (税役制

度の地方的・歴史の相違に関する研究) 佐伯 富 山根幸夫 菊池英夫 鶴見尚弘 草野 靖

〔研究目的〕 中国史研究の基本史料を豊富に含んでいる歴代地方志を体系的に蒐集・整理し、これを基礎として書誌・社会・財政三班を組織し、近世中国社会の基礎構造を研究する。わが国にも多数の地方志が存在するが、旧北平図書館所蔵の善本にして、久しくアメリカ議会図書館に保管(昭和四十一年台湾へ返還)されていた、いわゆるLC北京善本中には、わが国に現在しない地方志も多数存在するので、全部マイクロ・フィルムにしてわが国でも利用できるようにする。

〔本年度の経過〕 上述のようにマイクロ・フィルムを購入して引伸ばし、一応製本を完了したものは、昭和四十年年度の約三〇〇点にひきつづき、本年度は約二五〇点を引伸ばした。その内容については『北平図書館善本焼付目録二』を刊行した。地方志の他、相当数の文集をも引伸ばしたので、その焼付目録も漸次刊行する予定である。

#### 4 総合研究

課題 「金石文を主とした朝鮮史の基礎的研究」

研究代表者 末松保和

研究分担者 (新羅以前) 末松保和 村山正雄 (高麗李朝) 田川孝三 武田幸男 森岡 康 長 正統 (朝鮮

古語) 河野六郎 (滿州文) 松村 潤 (蒙古文) 岡田英弘 (金石文一般) 榎本龜治郎 杉山信三

〔研究経過の概要〕 本研究が対象として扱う朝鮮金石史料は従来から朝鮮史研究の第一次史料として重視されながら、基本的な調査研究が不十分であつたため、十分に史料的价值を發揮させることのできなかつたものである。本研究ではとくにこの点に留意し、昭和四十一年度から三ヶ年の計画で国の内外にわたつて金石史料とくに拓本を集収し、目録を作成する一方、そのうちの重要なものをえらんで解説・校訂を行う予定である。そのうち四十一年度中に行つた主な仕事はつぎのごとくである。

(1) 国内の各種拓本の調査と複製写真の作成

とくに「広開土王陵碑」「真興王巡狩碑」等のそれぞれについての異種拓本の調査に重点をおいた。

(2) 韓国史料の集収

「奉徳寺鐘銘」をはじめ十数点の拓本を購入調査した。それらはいずれも戦後韓国で新たに採訪されたものである。

課題 「パリー語辞典編纂のための基礎的研究」

研究代表者 辻 直四郎

研究分担者 (第一班、パーリ語辞典における諸原則の解明) 辻直四郎 水野弘元 中村 元 金倉円照 干潟龍祥  
山口 益 舟橋一哉 足利惇氏 (第二班 Kの部の研究) 雲井昭善 桜部 建 前田恵学  
〔研究経過の概要〕

本研究は、デンマーク学士院に保管されているパーリ語彙に関する資料にもとずき、パーリ語辞典を編纂するためにする基礎的な研究である。従来その資料の入手に努力してきたが、昭和四十年から本格的な研究の段階にはいり、本年はSumangalavāṣīniから語彙をひろい、デンマーク資料と対比した。その結果 A Critical Pali Dictionary, begun by V. Trenckner のために語彙を輯集すべき文献の範囲についてリストを作製し、デンマークに日本側の意見としてこれを提示した。

著書 水野弘元 干潟龍祥 舟橋一哉 桜部建共編 『印度仏教固有名詞辞典』補正表、法蔵館、昭和四二年二月

## 5 各種研究委員会

### 第一部 近代現代アジア研究

#### 近代中国研究委員会

近代中国に関する研究を推進するために、図書を集積整理し、研究書・参考書を編集刊行することを目的とする。本年度に出版・収集された図書は次の如くである。

(1)出版

近代中国研究 第七輯 一九六六年二月 A 5 四二三頁

中国社会経済史語彙 星 斌夫編 一九六六年二月 B 5 四二五頁

解放日報記事目録 I 一九六七年一月 B 5 二四三頁

清末の秘密結社 資料篇 佐々木正哉編 一九六七年三月 B 5 三〇〇頁

近代中国研究センター彙報 7 一九六六年六月 B 5 三二頁

近代中国研究センター彙報 8 一九六六年九月 B 5 三二頁

(2)収集図書

和漢書 中国文 一、〇八二点、 邦文 二九二点、 漢籍 一九点

洋書 二三九点

近代日本研究委員会

欧米における日本研究論著の調査研究を行なった。

第二部 東アジア研究

東亜考古学研究室

梅原末治氏の寄贈にかかる「梅原考古資料」日本関係の資料を年代順に大別し、各時代ごとに遺物、遺跡地域等により検索出来る様に整理分類を行つた。資料の整理分類の一切は、平田美智子氏が担当した。

## 古代史研究会

西周金文（西周金文辭大系）講読会を開き、言語、経学、考古、歴史等の諸方面からする解読研究を行っている。

## 敦煌文献研究委員会

前年度からの継続事業として、国内国外に現存する西域出土古文書・古文献の所在調査・収集・整理及び内外の諸機関並びに研究者の要望にしたがつて収集資料の公開・複写サービス等をおこなつた。また本年度は前年度に引き続き『スタイン敦煌文献——及び研究文献に引用紹介せられたる西域出土漢文文献——分類目録初稿 非仏教文献之部』の編纂をおこない、「古文書類第二分冊寺院文書」（油印）を刊行した。次年度には「典籍類」の中「言語文献」、「道教文献」、「文学（変文）文献」の最終原稿を作成し、その刊行を図る。

## 宋史提要編纂協力委員会

本年度には、先に原稿の完成した宋代史年表が、ハーヴァード・エンチン研究所の好意により、北宋部分の出版費を供給されたので、その編集と出版に努力し、現在かなり進捗している。

また前年度に引きつづき、文部省科学研究費による「宋代以降中国農村社会経済語彙の研究」の中、宋代班として「宋会要輯稿」食貨の語彙索引及び要綱の作成に従事した。そのため毎月一回研究会を開いて作成したカードの検討に当り、市糶粮草、経総制錢、賦税雜録、茶法雜録その他の語彙カードと要綱とを作成した。また宋代名人伝記索引は、宋人文集、地志、金石類、永樂大典などに見える伝記の索引カード原稿がほぼ完成したので、今後は刊行を目標としたい。宋代研究文献速報は外国からも好評を得ているので引きつづき作成して便に供している。

### 明代史研究委員会

前年度からの継続事業として、明清社会経済語彙の語彙解をつくる作業をつづけている。分担者は田中正俊・岩見宏・鶴見尚弘・山根幸夫の四人である。昭和四十一年九月からは神戸大学文学部助手谷口規矩雄氏を内地留学研究員として明代史研究室へ迎えた(昭和四十二年二月まで)。

また、明初の基本史料である『御製大誥』の輪読会を隔週にもち、現在『大誥統編』を読了した。その他、月一回定例研究会をもち、同じ専門分野の研究者を招いて研究発表をきいている。

### 第三部 満蒙・朝鮮研究

#### 清代史研究委員会

- (1) 「清太宗実録校訂本の作成」 清朝初期史の資料として満文老檔ともつとも密接な関係をもつものは清実録であ

り、老檔に欠落している箇所をも補うことが出来る。とくに太宗朝の場合は老檔と実録の両者によつて相互に史実を補える点が甚だ多く、実録もまた老檔と相並ぶ重要な根本史料である。しかし通行の乾隆重修の太宗実録は史料的価値が劣るので、史料として使用するには順治初修本や康熙重修本によらねばならない。これらはまだ刊本がないが、幸に我が国には江戸時代に舶来された康熙本三種が現存する。しかしこれらは文字の誤写や出入も少なくないので、これを校訂して出版することは学界を裨益するところが多大であると思われる。本年度においてはまずこれら三種のテキストを撮影焼付し、毎週東洋文庫において校合を行うとともに、乾隆本実録、満文老檔および各種の文書集等を参照して校異の作成にあつた。

(2) 「台湾における滿蒙の言語及び文献の実地調査」 一九六二年十月より十一月にかけて第一回調査(神田・松村・岡田)を行い、満州語の話し手である台湾大学教授広祿氏ならびに蒙古諸方言についての多くの教養ある話し手と接触する機会を得、将来における本格的調査がきわめて有望であることを打診し得た。一方滿蒙語文献については中央研究院歴史語言研究所に所蔵されている多数の明清檔案類の中に重要資料を発見し、一九六四年十二月より翌年一月にかけて第二回調査(神田・松村)を行い、これが調査にあつたが、たまたま滞在中において台中の故宮博物院の所蔵物中に、その所在が不明であつた満文原檔四十冊の存在が確認され、しかも同博物院が台北郊外士林への移転が行われ、その閲覧の便宜を得るにいたつたので、一九六六年八月三日より四週間にわたる第三回の調査(神田・松村・岡田)を実施した。もとより同資料は六千頁にわたる尨大なもので、今次の調査においては、わずか二冊を検訂し得るにとどまつたが、その資料的価値については、従来予想されていたよりは、遙かに高いことが判明した。なお詳

細については九月十七日の東洋文庫談話会において報告した。

#### 朝鮮研究委員会

- (1) 朝鮮金石拓本および関係文献を蒐集し、広開土王碑その他重要な拓本数点の写真複製をおこなってその解説校訂の作業に着手した。これは総合研究「金石文を主とした朝鮮史の基礎的研究」の一環としておこなったものである。
- (2) 日鮮関係史料の調査とくにいままでほとんど手がつけられていなかった釜山倭館関係記録の調査を行なった。これは倭館駐在の日本側役人の作成した記録であるが、この調査は将来この史料に対応する朝鮮側の史料（現在大部分韓国にある）の調査をおこなうための基礎作業として着手したものである。
- (3) 李朝実録研究会を毎週開いて世宗実録の講読研究を行なった。

#### 第四部 中央アジア・イスラム・チベット研究

##### 中央アジア・イスラム研究委員会

特定研究「アジア・アフリカ地域研究」の一環として、「イスラム地域社会構造」の研究を分担し、三十三年度より八年間、我が国には殆ど将来されていない、イスラム圏地域刊行の現地語文献資料の組織的蒐集にあたってきたが、昨四十年度ももって本地域研究も一応打切となつたので、資料蒐集の事業は大幅に縮少せざるを得なくなつたので、本年度は今までの蒐集資料の整理にあつた。一方この地域研究の総括的しめくりのテーマである「日本にお



けるアジア・アフリカ研究の現状と課題」にしたがつて、西アジア部門のうち、とくにイスラム以降十八世紀までを担当して、報告書の作成および、研究文献解題目録の編集刊行を行なつた。

### チベット研究委員会

チベット研究委員会は、昭和三十六年度から、ロックフェラー財団補助金によるチベットについての国際協力研究プロジェクトに参加、インドからチベット人学者三名を招聘して、「チベット人との協同によるチベットの言語・歴史・社会・文化の総合的研究」を開始したが、昭和三十九年度からは文部省補助金による特別調査研究として同研究を継続、現在に到つた。この間、各分野におけるチベット研究が進捗したことは言うまでもないが、チベット人の直接指導により、チベット語を話し、チベット文献を正確に解読できる若い研究者が育ち、また、チベット人を媒介として、インド、シッキムなどからチベット文献・資料を入手、整備することによつて、今後さらに研究を進展させるための基盤が形成された。昭和四十一年度における研究の進行状況は次のようである。

#### 1 チベット歴史事典の編集

担当 山口瑞鳳、ソナム・ギャーツォ、ケツン・サンボ

パオ・ツイラツ・テンワ *dpa'o gtsug lag phreng ba* 「ケーバー・ガトゥン」 *m khas Pai dga' ston* (一五六四年) を調査し、同書によつて事典の項目、記載事項を補訂した。その結果、十一世紀より十八世紀中葉に到る間の編集資料はほぼ整備された。

2 土観 *thu'u bkwan* 「トゥムタ」 *gyub mtha'* の研究

担当 多田等観、山口瑞鳳、川崎信定、立川武蔵、小川一乗、二瓶幸子、ソナム・ギャーツォ、ケツン・サンボ  
「カギユ派」「サキヤ派」の章の訳註原稿の作成を終り、「カードム派」「ゲルク派」の章の研究を開始した。

3 日本に現存するチベット文献の目録の編集

担当 山口瑞鳳、ケツン・サンボ

東洋文庫所蔵蔵外チベット文献、東洋文庫マイクロ・フィルム所蔵大英博物館所蔵敦煌出土チベット文献の基礎目録カードと各文献との照合、カードの補訂を終り、目録原稿の作成を開始した。

4 現代チベット語の記述的研究

担当 北村甫、湯川恭敏、星実千代、ツェリン・ドゥーマ、ソナム・ギャーツォ、ケツン・サンボ

ラサ方言の文法研究、録音資料(会話、物語)の文字化と分析を進め、ヤクテ *Yag te* 方言の調査、第十四世ダライラマ「わが国土と人民」 *ngos kyi yul dang ngos kyi mi dmangs* (一九六三年)などを資料とする現代

文語の研究を開始した。

5 講読会の開催

次のテキストについて毎週一回ずつ、チベット人を中心に講読会を開いた。

- (1) The Council for Tibetan Education: "Primary school Reader 5." Dharmasala, 1963. (終)
- (2) Dandinsuren(ed.): "Tibetan and Mongolian Tales of Vetalu." Ulan Bataf, 1964. (終)

(3) *Deb ther dmar po gsar ma* (昭和四十二年度に継続)

6 「サキヤ派全書集成」複製出版の準備

担当 北村甫、山口瑞鳳、ソナム・ギャーツォ

ソナム・ギャーツォ師将来の「サキヤ派全書集成」*sa skyu bka' yun* すなわち、クンガ・ニンポ *kun dga' snying po* から、パクパ、*'phags pa* (八思巴) に到るサキヤ派五大師の全集に、同派のゴルチェン・クンガ・サンポ *Ngor chen kun dga' bzang po* など三師の著作集を加え、複製出版することを計画、目次・索引の原稿を作成、チベット字活字を設計するなど、準備を完了した。

チベット人協力者は、以上の諸研究に従事したほか、東京大学、東京外国学大学、大正大学のチベット語講義に講師あるいはインフォーマントとして参加し、東京大学、高野山大学などのチベット研究者の研究（仏教学、民族音楽学など）に協力した。また、チベット人の媒介により、ニンマ派の「七蔵」*mdzod bdun* など貴重文献を入手することができた。

本研究開始以来、研究全般について指導にあたって来られた多田等観師が、昭和四十二年二月十八日、心筋梗塞により逝去された。

## 第五部 南アジア・インド研究

## 南方史研究委員会

隔週金曜日「琉球歴代宝案」の講読研究会を開いている。

### 6 研究者養成

従来、わが国においては、東南アジア・チベット・インド・イスラム圏及び中央アジア・満蒙など特殊な言語・文字の修得を前提とする研究分野は、基礎的な資料の収集も充分でなく、その研究の持つ意義の重要性にもかかわらず甚だ立ち遅れていた。東洋文庫は、戦前よりこれら諸地域の現地語資料の収集につとめ、またこれら特殊分野の次代を担う専門研究者を養成するために研究生の制度を設けていたが、戦後に到り特にこうした未開拓分野の振興を目的として、文部省の補助を得、研究者養成制度が復活された。更に右の特殊分野以外についても、ハーヴァード・エンチン研究所よりの援助金を得て大学院博士課程修了程度の人材に引続き数年間の研究の機会を与え、後継研究者の養成が行われてきた。文部省及びハーヴァード・エンチン研究所補助金等による本年度の研究生は左記の通りである。

チベット研究

山口瑞鳳

「チベット歴史辞典の編輯及びチベット暦、第六代ダライラマ伝の研究」

インド研究

山崎元一

「インド古代史の研究」

中国研究

宋代史

草野 靖

「通貨問題より見たる宋代財政史の研究」

中国研究

宋代史

丹 喬二

「宋代農村社会の研究」

ビルマ研究

西 義郎

「ビルマ語の研究」

7 職員の研究業績

青山定雄

〔論文〕 「宋代における華北官僚の系譜について その三」 (中央大学紀要 史学科 一二号)

荒松雄

〔著書〕 『デリー諸王朝時代の建物の研究第一巻、遺跡総目録篇』 (山本達郎・月輪時両氏と共著、昭和四二年三月)  
〔講演〕 「パキスタン一九六二年憲法について—イスラム条項と東西両州の問題を中心として」 (東大東洋文化研究所、昭和四二年二月)

〔評論雑記〕 「回教—宗教と政治・社会—」 (朝日ジャーナル) 連載「アジアの現実」所収、昭和四二年八月)

生田滋

〔翻訳〕 「トメ・ピレス著『東方諸国記』」 (長岡新治郎・池上岑夫等と共訳、岩波書店、昭和四一年一〇月)

〔雑記〕 「東アジア諸国における西洋文化の摂取に関する国際シンポジウムについて」 (国際文化) 昭和四一年一二月号)

市川健二郎

〔著書〕 『タイの近代化と権力構造』 (アジア経済研究所、昭和四一年一月)

〔論文〕 「東南アジア社会研究の方向」 (アジア経済第七卷四号、昭和四一年四月、一〇一—一〇九頁)

「比較社会構造論—アメリカから見たアジア史の捉え方—」(東洋学報第四九卷二号、昭和四一年九月、九〇〜九八頁)

「タイ華僑の同化過程」(民族学研究第三二卷四号、昭和四二年三月、二七七〜二八八頁)

〔講 演〕 「アジア近代化と比較社会構造」(東洋文庫談話会、昭和四一年七月)

「東南アジア史の構造についての一般討論—タイ史の捉え方を中心として—」(東京大学東南アジア史

研究セミナー、於大学セミナー・ハウス、昭和四一年七月)

〔学界動向〕 「海外研究情報」(東南アジア史学会会報第二号、昭和四二年三月)

岩 生 成 一

〔著 書〕 『南洋日本町の研究』(岩波書店、昭和四一年五月)

〔講 演〕 「独医ケンペルの日本史とその日本思想界に及ぼした影響」(日本学士院例会、昭和四一年九月)

岩 崎 富 久 男

〔講 演〕 「梁啓超と戊戌変法」(中国文学の会一〇月例会、昭和四一年一〇月八日)

宇 都 木 章

〔論 文〕 「墨子尚賢論の一側面」(「史苑」二六卷一・三号、一九六六年一月、一三三〜一四〇頁)

梅 原 末 治

〔著 書〕 『朝鮮古文化綜鑑第四卷高麗』(養徳社刊、昭和四一年五月)

〔論文〕

『殷代石玉骨牙文物展観解説』（黒川古文化研究所、昭和四一年二月）

「故宮博物院の利器系の古玉三種」（故宮季刊一ノ一、昭和四一年七月）

「中国出土の玻璃鈿（七宝）の遺品」（『ミュージアム』一八五号、昭和四一年八月）

「南鮮出土の有蓋両耳銅壺」（韓国「考古美術」七ノ八、昭和四一年八月）

「福岡県下出土の夔鳳鏡片」（『九州考古学』二八号、昭和四一年八月）

「殷代人物彫像考」（慶祝李濟博士七十歳論文集「中国台平、昭和四二年一月」）

「晋率善穢伯長銅印」（韓国「考古美術」八ノ一、昭和四二年一月）

「卞卅の金銅冠」（同上八ノ二、昭和四二年二月）

「新たに知られた古代の若干の玻璃容器」（『ミュージアム』一九二号、昭和四二年三月）

「殷代人物彫像考」（『慶祝李濟博士七十歳論文集』下冊所収）

〔講演〕  
「中国の古玉」（中華民国故宮博物院、昭和四一年四月九日）

「殷代白陶攷」（中華民国国立中央研究院歴史語言研究所、昭和四二年一月六日）

「台湾史前文化観」（国立台湾大学人類考古学系學術講演会、昭和四一年五月一〇日）

「侯家莊殷大墓群と其の文物」（東洋文庫特別講演会、昭和四一年五月三〇・三一日）

「殷代の殷大墓とその文物」（黒川古文化研究所大阪第一回公開講演会、昭和四一年六月一八日）

「殷代の彫塑芸術」（京都国立博物館學術講演、昭和四一年九月）

榎 一 雄

〔同上〕（黒川古文化研究所公開講演、昭和四一年一月三日）

〔著 書〕 『邪馬台国（増補版）』〔日本歴史新書〕東京、至文堂、昭和四一年一月刊、B 6判、二六四頁）

『東洋史』（鎌田重雄博士と分担執筆、東京、日照堂、昭和四一年四月刊、A 5判、本文二三五頁、図版・地図

・索引）

〔講演〕 「邪馬台国について」（立教大学史学会大会、昭和四一年一月二日）

「シルクロードの現実」（日本女子大学教養講座、昭和四一年二月七日）

「アジア地域におけるドキュメンテーション活動の諸問題」（文部省主催第六回ドキュメンテーション講習

会、昭和四二年一月三日）

〔学界動向〕 「北京図書館所蔵敦煌文書の影印によせて（上・下）」（学鐙第六三卷五号二三～二六頁、六号二二～二六頁

昭和四一年五・六月）

「ウェーレーと東洋学」（国際文化一四七号二四～二七頁、昭和四一年九月）

「アジア地域におけるドキュメンテーション活動の諸問題」（文部省主催ドキュメンテーション講習会テキ

スト、一九六七年、日本学術振興会刊、七九～八八頁）

〔書 評〕 「石井良助・井上光貞編『シンポジウム邪馬台国』」（昭和四一年一〇月二九日、東洋史談話会で口頭発表）

〔評論雑記〕 「シルクロードの現実（一、二）」（月刊教育第一六卷四号一～三頁、七号一～二頁、昭和四二年二・三月）



「アジアの文化交流(一、二)」(国際文化一五二号二、三、一五三号六、八頁、昭和四二年二、三月)

岡田英弘

〔論文〕「ダヤン・ハガンの先世」(史学雑誌第七十五編第八号、昭和四一年八月)

“Life of Dayan Qayan” Acta Asiatica 11, October, 1966.

〔講演〕“Life of Dayan Qayan” May, 1966, at the Eleventh International Conference of Orientalists in Japan.

(要旨は国際東方学者会議紀要第十一冊に掲載)

〔学界動向・報告〕「一九六五年の歴史学界―回顧と展望―東洋史(満州・蒙古)」(史学雑誌第七五編第五号、昭和四

一年五月)

「第三回若手アルタイ学、中央アジア学研究者集会」(東洋学報第四十九卷第二号、昭和四一年九月)

神田信夫

〔資料紹介〕「浅見文庫本備辺司関録」(駿台史学一九号、昭和四一年九月、一二七～一三八頁)

〔書評〕「広禄・李学智者『清太祖朝老滿文原檔与滿文老檔之比較』」(東洋学報第四九卷一号、昭和四一年六月、

一〇二～一〇七頁)

「三田村泰助著『清朝前史の研究』」(東洋史研究三五卷一号、昭和四一年六月、一一二～一一五頁)

〔講演〕「滿文原檔について」(東洋文庫談話会、昭和四一年九月一七日)

〔その他〕「国際アルタイ学者会議」(明治大学新聞「昭和四一年七月二八日」)

菊池 英夫

〔論 文〕 「節度使権力といわゆる土豪層」 (歴史教育一四卷五号、四六〇五八頁、昭和四一年五月)

「太湖周辺の旧地主庄園 その一」 (山梨大学教育学部研究報告第一七号、三〇〇四三頁、昭和四二年三月)

「廖仲愷と第一次国共合作」 (アジア経済旬報六四八・六四九・六五〇号、昭和四一年五〇六月)

〔動 向〕 「東洋経済史学史、日本における方法論、時代区分論」 (井上幸治・入交好脩編「経済史学入門」 広文社刊、

総説編収所、昭和四一年六月)

「中国における封建制理論覚え書き」 (歴史評論一九七号、六七〇七六頁、昭和四二年一月号)

〔雑 記〕 「中国の歴史博物館(2)」 (東洋学報第四九卷二号一三三〇一四七頁、昭和四一年九月)

河野 六郎

〔論 文〕 「朝鮮漢字音の研究 V、資料音韻表 I」 (朝鮮学報第四十二輯一〇七〇頁、昭和四一年一〇月)

「朝鮮漢字音の研究 VI、資料音韻表 II」 (朝鮮学報第四十二輯七〇一一四〇頁、昭和四二年二月)

後藤 均平

〔講 演〕 「後漢書所見越南三郡叛乱記事」 (文部省総合研究「中国産業史の研究」研究会)

〔学界動向〕 「一九六三年の歴史学界、中国・殷周の部」 (史学雑誌第七五編第五号昭和四一年五月)

〔書 評〕 「東洋の歴史一・二」 (史学雑誌第七六編第三号、昭和四二年三月)

佐伯 富

〔著 書〕『宋の新文化』（「東洋の歴史」第六卷、人物往来社刊、昭和四二年三月）

末松保和

〔著 書〕『青丘史草 第二』（私家版、昭和四一年七月、A5判、三八五頁、新収論文一六篇）

〔論 文〕「旧三国史と三国史記」（朝鮮学報第三九・四〇合併号、昭和四一年四月）

立花孝全

〔編 書〕「The Catalog of Periodicals in Foreign Languages in The Toyo Bunko.」（東洋文庫、昭和四一年五月）

〔論 文〕「Lam-rim chen-moに見られるSam-yasの宗論について」（印度学仏教学研究第一五卷一号、昭和四一年二月）

辻直四郎

〔著 書〕『インド文明の曙——ヴェーダとウパニシャッド——』（岩波新書、昭和四二年）

〔編 書〕「ヴェーダ・アヴェスター」（世界古典文学全集、筑摩書房、昭和四二年）

〔論 文〕「ケーシン・ダールビアをめぐる」（金倉円照博士記念論文集二二三～一三七頁、昭和四一年）

「故ルイ・ルスー博士主要著作目録」（東洋学報第四九卷四号〇一～〇三三頁、昭和四二年三月）

〔書 評〕「Ludwik Sternbach: Čānākya-Niṭi-Text Tradition, Vol. One.」 Hoshiarpur 1963, *Indo-Iranian*

*Journal* 9 (1966), p.301—308.

“Ludwik Sternbach: Cānaka-Rāja-Niti”, (Madras, Adyar 1963; ib. p.307—308.)

鳥海 靖

〔論 文〕

「鉄道敷設法成立過程における鉄道期成同盟会の圧力活動」(東京大学教養学部人文科学科紀要第四二輯「歴史学研究報告」第一三集「歴史と文化」IX、昭和四十二年三月)

〔書 評〕

「読売新聞社編 東京の百年Ⅰ」(日本史の研究第五六、昭和四十二年二月)

〔座談会〕

「再検討シリーズ第七回 第二次世界大戦」(歴史教育研究四〇号、昭和四一年七月)

「再検討シリーズ第八回 戦後世界の起点——第二次世界大戦と戦後の諸問題——」(歴史教育研究

四一号、昭和四一年一〇月)

藤 枝 晃

〔論 文〕

「殷人の絵文字——文字の生い立ちⅠ」(日本美術工芸三四一—号八一—九〇頁、昭和四二年二月)

「神々との対話——文字の生い立ちⅡ」(日本美術工芸三四二—号五四—五九頁、昭和四二年三月)

〔翻 訳〕

「(マルタ・ボイエル著) デンマーク国立博物館蔵蒔絵小箆筒」(日本美術工芸三三三—号、昭和四一年五月)

「(マルタ・ボイエル著) 日本の精霊たち」(読売新聞、昭和四一年八月一九日)

〔評論雑記〕

「ペリオ・コレクシオン複写始末記」(図書二〇一—号八—一二頁、昭和四一年五月)

「大谷コレクシオンあれこれ」(西域探検全集) 月報1 四—六頁、昭和四一年五月)

「ハンブルグのゼミナール」(図書二〇二—号四—七頁、昭和四一年六月)

「インド省図書館のスタイン収集写本」(西域探検全集)月報3 三六頁、昭和四一年九月)

「飛雲閣の膏」(図書二〇四号一〇一三頁、昭和四一年八月)

「オフェリアの末裔」(図書二〇五号二三二六頁、昭和四一年九月)

「二人のケンブリジ・メン」(図書二〇七号二〇二三頁、昭和四一年一月)

松村 潤

〔講演〕「満文原檔について」(東洋文庫談話会、昭和四一年九月一七日)

「台湾における清初史料について」(日大史学会秋期講演会、昭和四一年一〇月八日)

「崇徳改元をめぐる諸問題」(史学会大会、昭和四一年一月一三日)

宮坂 宏

〔論文〕「中華ソビエト共和国の選挙制度」(愛知大学国際問題研究所紀要第三九号、昭和四一年六月)

「中国革命根拠地の選挙制度について」(専修大学社会科学研究所月報第三三三号、昭和四一年六月)

〔編訳書〕「中華ソビエト共和国・解放区選挙法令資料」(福島正夫教授と共編訳、プリント版、昭和四二年二月)

〔書評〕「大隅逸郎著『清朝の預備立憲』と『欽定憲法』」、同氏『欽定憲法大綱』の破産と『十九信条』の頽布」、同氏『清末における婦人解放運動と女俠秋瑾』(法制史研究一六)

村松 祐次

〔論文〕「エチアンヌ・バラシユとその遺著二種」(一橋論叢五七卷六号)

「毛沢東思想と文化革命」(現代アジア研究会「毛沢東思想と中国の社会主義」所収)

「孫治方経済理論の批判をめぐって」(「共產圏問題」一〇卷一二号)

“A documentary study of Chinese landlordism in the late Ching and the early Republican Kiangnan” (BSOAS. Vol. XXIX, part 3)

“The land problem in the modernization of China” (Acta Asiatica 12)

[書評] 「中国研究の近刊数種——F. Michael: “The Taiping Rebellion” 簡又文『太平天国典制通考』、同

『太平天国全史』、J. Chester Cheng; “Chinese sources for the Taiping Rebellion.”」(「橋論叢五  
七卷一号」)

「天海謙三郎著『中国土地文書の研究』」(東洋学報第四九卷二号、昭和)

護 雅 夫

[著書] 『古代トルコ民族史研究 I』(山川出版社、昭和四二年三月、六五六頁、英文二五頁)

『日土会話練習帖 (Pratik Japonca-Türkçe ve Türkçe-Japonca Konusma Rehberi)』(大学書林、  
昭和四一年十二月、一三三頁)

[論文] 「東突厥国家内部の胡人」(古代学第二二卷一号、昭和四〇年五月、一〜二〇頁)

「突厥の啓民可汗の上表文の文章——読「突厥碑文」筋記(二)——」(東洋学報第四八卷一号、昭和四〇  
年六月、四九〜七九頁)

“On Chi-I-fa(Eltäbär/Ektäbir) and Chi-Chin (Irkin) of the T'ieh-Jê Tribes” (Acta Asiatica, No.9, 1965, 9, pp.31~56.)

『契丹』の語源について——読「突厥碑文」節記(一)——(『ユーラシア文化研究』1、昭和四〇年一月、三七~四七頁)

「西域史の第一展開」(『西域』、河出書房、昭和四一年五月、五九~七三頁)

“Ch'i-min Hakan'ın bir çin İmparatoruna gönderdiği mektubun üslûbu üzerine” (Türk Kültürünü Araştırma Enstitüsü Resid Rahmeti İçin, 1966, pp. 363—371)

【講演】「Türk Dil Kurumu : Dilde Özleşmenin Sınırı Ne Olmalıdır? について」(東大東洋史談話会、昭和四〇年二月四日)

「レニングラードの印象」(モスクワ放送局、昭和四〇年四月一〇日)

「日本の大学制度——とくに東大を中心として——」(レニングラード大学東洋学部、昭和四一年三月三一日)

「最近の日本における北・中央アジア史研究」(ソ連科学アカデミーアジア諸民族研究所レニングラード支所、昭和四一年四月一三日)

「日本における主要なる東洋学研究機関」(レニングラード大学東洋学部、昭和四一年四月一五日)

「最近の日本における中国史研究」(レニングラード大学東洋学部、昭和四一年四月一六日)

「ソヴェエト連邦科学アカデミーアジア諸民族研究所レニングラード支所について」(東洋文庫談話

会、昭和四一年六月一八日)

「ジュダノフ名称・レーニン勲章・レニングラード国立大学東洋学部について」(東大東洋史談話会、

昭和四一年七月二日)

「レニングラードのアルタイ学者たち」(第三回若手アルタイ学・中央アジア研究者集会、昭和四一年七月一

日)

「最近出版された突厥・ウイグル史に関する著書・論文の若干について」(東大東洋史談話会、昭和四一

年一〇月二九日)

「最近のソ連における北アジア史(突厥以後)の研究の一斑」(京大内陸アジア研究所、昭和四一年一月一日)

一日)

「ソ連、とくにレニングラードにおけるアルタイ学研究」(内陸アジア史学会、昭和四一年一月一日)

「ソ連の宗教、とくにイスラーム教について」(東大仏教青年会、昭和四一年一月二八日)

「ソヴィエト連邦科学アカデミーアジア諸民族研究所(レニングラード支所)における東洋学研究」

(東洋学報第四九卷二号、昭和四一年九月、七六～九〇頁)

「ソ連の東洋学について——レニングラード大学東洋学部を中心に——」(思想、五〇七号、昭和四一年

九月、七七～八六頁)

「レニングラードの東洋学の印象」(ソビエト科学アカデミー版『世界史』月報三三、昭和四一年九月、七)



九頁)

「北アジア・中央アジア」(国際歴史学会議日本国内委員会編『日本における歴史学の発達と現状Ⅱ』、東大出版会、昭和四一年一月、三一五～三二七頁)

「ソ連科学アカデミーアジア諸民族研究所レニングラード支所の『東洋学者アルヒーフ』(史学雑誌第七五編一二号、一九六六年二月、五四～六二頁)

〔書評〕

「田村実造編『明治満蒙史研究』」(史学雑誌第七三編三号、昭和三九年三月、九一～九二頁)

「Tutengil, C. O.: Ziya Gökalp üstüne Notlar」(「イスラム世界」四、昭和四〇年九月、六五～七七頁)

「エス・ゲロークリヤシュトルスイ著『古代チュルクのルーン文字諸碑文』(史学雑誌第七四編一一号、昭和四〇年一月、七六～八八頁)

「トルコ言語協会編『言語における「純粹化」の限界』(東洋学報第四八卷三号、昭和四〇年二月、一一一～一二四頁)

「旗田巍著『元寇』」(週刊読書人、一九六五年一月二五日)

「モスタールト著・磯野富士子訳『オルドスロ碑集』」(読売新聞、昭和四一年三月一七日)

〔翻訳〕

「カルピニ・ルブルク、中央アジア・蒙古旅行記」(桃源社、昭和四〇年四月、三六三頁。)

「アブデュルカディル・イナン著『チュルク諸族のシャーマニズムにおける結婚と出産』」(北アジア

民族学論集』第一集、昭和四〇年一〇月七四～八六頁)

〔雜記〕 「白鳥庫吉と内藤湖南」 (「朝日新聞」、昭和四〇年八月一〇日)

「ソ連における日本研究」 (「朝日新聞」、昭和四一年五月二日)

「中央アジアのイスラーム教」 (「朝日新聞」、昭和四一年七月八日)

「ソ連の大学生」 (「東大仏青ニュース」九、昭和四一年九月、一～三頁)

「コズロフの探検の背景とその功績」 (白水社『西域探検紀行全集』第二一卷月報六、昭和四二年二月、一～

三頁)

森岡 康

〔論文〕 「許博の疏文と贖還批判(下)」 (朝鮮學報第三九・四〇合併特輯号、昭和四一年四月)

山口 瑞鳳

〔著書〕 『チベットの仏教』 (講座東洋思想「仏教思想I」収載、東大出版会)

〔論文〕 「古代チベット史考異(上・下)」 (東洋學報第四九卷三・四号、昭和四一年二月・昭和四二年三月)

〔講演〕 「古代チベット史のクロノロジー」 (チベット学会、高野山、昭和四一年一月)

山崎 元一

〔論文〕 「マウリヤ王朝時代における仏教の伝播——第三結集・諸方教化伝説の再検討——」 (東洋學報第四九

卷三号、昭和四一年二月)

〔講演〕 「マウリヤ朝時代における仏教の発展——伝導師派遣伝説の再検討——」 (史学会第六五回大会、昭和四一

年一月二三日)

山根幸夫

〔著書〕『明代徭役制度の展開』(東京女子大学学会、昭和四一年三月、二三〇頁)

〔編書〕『日本現存明人文集目録』(小川尚共編、昭和四一年一〇月、一五四頁)

〔論文〕「服部宇之吉『清国通考』解題」(株式会社大安、昭和四一年九月)

「井上・入交編『経済史学入門』東洋経済史篇、近・現代総説」(広文社、昭和四一年六月、二七八〜二八四頁)

「辛亥革命より新民主主義革命へ」(東京女子大学論集一七一一、昭和四一年九月)

附(一) 東洋文庫附置 ユネスコ東アジア文化研究センター

(The Centre for East Asian Cultural Studies)

ユネスコ東アジア文化研究センターは、東洋文庫の情報連絡機関としての機能と実績とを高く評価するユネスコの要望によつて、昭和三十六年七月一日に東洋文庫の附置機関として設立された。

ユネスコは一九五七年以来、向う十年間の継続事業として「東西文化価値の相互理解に関する重要事業計画」(The Major Project on the Mutual Appreciation of Eastern and Western Cultural Values) を推進しているが、この目的遂行に恒久的に協力する施設 (associated institutions) として、まず一九六一—六二年度に東アジア(ブルマ以东) 各国の研究機関の連絡網の中心となるべきセンターの設立が計画された。同じ趣旨による同様の施設がペイルト、ダマスカス、テヘラン、ニューデリー等のアジア各地にも設置されつつある。日本ユネスコ国内委員会は、これに呼応して、人文科学・社会科学の両分野に亘る東アジア地域の総合的文化研究を促進し、その成果を世界に紹介し、アジアに対する正しい理解を増進させるため、このセンターを東京に設置することとし、従来とも東洋学に関する国際的情報連絡機関としての役割をも果たしてきた東洋文庫に、これを附置することとなつた。

一 目 的

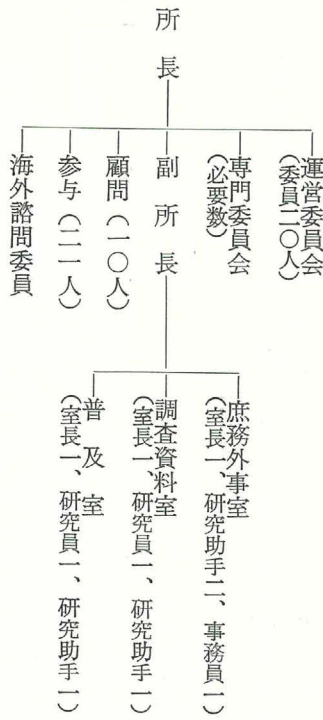
東アジア各国に於ける研究機関と連絡して東アジア(ブルマ以东) 地域の各国に於ける東アジア文化に関する研究

(人文科学・社会科学)の情報・連絡を緊密にすると共に、その研究を促進し、且つ成果の普及を計る、いわばクリ  
アリング・ハウスとしての機能を發揮することを目的とする。

## 二 経 費

当センターの経費は政府補助金及びユネスコ援助金によつて賄われる。

## 三 機 構



## 四 役員及所員

所長 辻直四郎

運営委員 福原匡彦

中村元

福井康順

松本信広

川野重任

岡野澄

岩村忍

竹内理三

田中一松

東畑精一

服部四郎

前田陽一

山本達郎

吉川幸次郎

岩生成一

尾高邦雄

森鹿三

高橋幸八郎

顧問

朝吹三吉

大浜信泉

金田一京助

原田淑人

小島祐馬

久松潜一

鈴木大拙

宮沢俊義

高垣寅次郎(一名欠員)

参与

青山秀夫

石田幹之助

石田英一郎

岩井大慧

岩淵悦太郎

長尾雅人

織田武雄

仁井田陞

海後宗臣

丸山真男

殿木圭一

宮崎市定

鈴木俊

宮本正尊

平塚益徳

三上次男

都留重人

水野清一

田村実造

米花稔

時枝誠記

所員

副所長 榎 一雄

専門員 J. R. McEwan

所員 生田 滋 市川 健二郎 岩崎 富久男 大塚 祐子 川久保 佐恵子

草原 克豪 竹之内 信子 外池 明江 直井 靖夫

平野 豊 (東洋文庫総務部参事兼務)

土肥 祐子 (昭和四十一年六月退職七月臨時雇員)

臨時雇員 箕輪 友吉 高橋 律子

五 運 営

運営委員会(委員二〇名)は事業の運営に関する事項を審議する。

顧問会議(顧問一〇名)は所長の諮問に応じ、事業について助言する。

六 事 業

センターの行なう事業の主なるものは左の通りである。

1 国際的協力による調査研究

- 2 内外研究機関との連絡および情報資料の交換
- 3 東アジア文化研究に関する資料の調査蒐集および交換
- 4 \*上記の諸事業、諸情報を速報する「東アジア文化研究」(センター機関誌、季刊)の刊行
- 5 \*東アジア文化研究に関する諸資料の刊行
  - (イ) 内外研究機関及び研究者一覧
  - (ロ) 各種の文献目録類
- 6 \*東アジア文化の研究成果の普及
  - (イ) 研究書・概説書の出版
  - (ロ) 非専門読者対象の読物「東アジア文化研究叢書」の編集刊行
- 7 東アジア文化に関する、東アジア地域外(主としてヨーロッパ)に保存されている史料の調査
- 8 内外学者の研究に対する便宜供与
- 9 フェローシップの企画および斡旋
- 10 研究会・講習会の開催
- 11 国際会議・シンポジウムの開催
- 12 その他センターの目的達成に必要な事業

\* 刊行物はすべて英文である。



七 昭和四十一年度事業概況

I 運営委員会及び顧問会議

1 運営委員会

第一回〔日時〕 昭和四十一年九月一日（火）

〔出席者〕 八名

〔報告〕 (1) 調査研究（B）国際会議について

(2) 調査研究（A）実地調査について

〔議題〕 (1) 昭和四〇年度事業報告

(2) 昭和四十一年度事業経過報告

(3) 昭和四二年度事業計画について

(4) 委員の改選について

第二回〔日時〕 昭和四二年三月二五日（土）

〔出席者〕 五名

〔報告〕 (1) 昭和四十一年度事業中間報告

(2) 調査研究（B）国際会議について

## 2 顧問会議

〔日時〕 昭和四一年九月二三日（火）

〔出席者〕 三名

〔報告〕 (1) 調査研究（B）国際会議について

(2) 調査研究（A）実地調査について

〔議題〕 (1) 昭和四一年度事業経過報告

(2) 昭和四二年度事業計画について

- (3) 調査研究（A）実地調査について
- (4) 昭和四二年度概算要求、一九六七～一九六八年度ユネスコ正規事業参加事業申請について

〔議題〕 (1) 昭和四二年度事業計画案ならびに予算案

(2) 一九六九～一九七〇年度ユネスコ正規事業参加事業申請について

## II 調査研究

### 1 調査研究（A）

「東アジア諸国における社会成層と階層移動に関する国際協力調査」

このプロジェクトは四一年度中にタイ国において実地調査を行なう計画をたて、そのための準備を行なった。八月

二三日に太平洋学術会議のために来日したタイ国チュラロンコン大学政治学部長カセム教授及び同社会学科プラスト教授との打合せ会を開催し、意見の交換を行なった。また、一二月一〇日より三週間に亘り東京大学助教授富永健一氏をタイ国に派遣し、関係学者機関と予備折衝を行ない、その結果、同氏を団長とする調査団を組織してタイ国に派遣し、調査を行なった。

## 2 調査研究 (B)

「東アジア諸国における西洋文明の受容の歴史的背景に関する国際協力調査」

今年度はこの調査研究の最終年度に当るので、「東アジア諸国における西洋文明の受容に関する国際シンポジウム」を一〇月三日より七日まで、東京、高輪プリンスホテルで開催した。

参加者 外国人代表 九名 日本人代表 一五名 (オブザーバー 七名)

## III 連絡及び情報交換

1 内外研究機関及び研究者一覧 (英文) の作成

「東アジア研究機関及び研究者一覧」(台湾・香港編)の編集を行なった。また「日本における東アジア研究機関一覧」(一九六七年版)を刊行した。

2 季刊「東アジア文化研究」(英文)の刊行

本年度は第一、四合併号として、一〇月に開催された調査研究 (B) のシンポジウムの議事録を三月に刊行した。季刊誌「東アジア文化研究 Vol. VI, Nos. 1-4」

3 文献抄録の作成

「東アジア研究に関する文献目録の目録（欧文・定期刊行物編）」（英文）の編集を行なった。

4 地域外資料目録の作成

国内現存の東アジア関係資料のマイクロフィルムを調査し収集した。

5 図書資料の購入

当センターの連絡情報交換に基づく上記諸事業の出版編集のため、図書資料三二八冊を収集した。

IV 出版物の作成

1 研究書・概説書の翻訳出版

前年度翻訳を完成したチャデン・フラッド訳「ラーマ四世年代記」第三巻を刊行した。なお訳者からの申出により、「附録、補遺、参考文献、索引」を四二年度に第四巻として刊行するために編集した。また、本年度において翻訳を行ない、来年度出版の計画であった「史料より見たる明治維新」第一巻英訳は四二年度においてこれを継続して行なうこととした。

2 非専門読者対象の読物（「東アジア文化研究叢書」）の出版

今年度は「東アジア文化研究叢書」として下記の図書を刊行した。

グエン・カク・カム著「ヴェトナム文化入門」（シリーズ 一〇〇）

A・タゴール著「中国に於ける新文学論争」（シリーズ 一一一）

V シンポジウム・研究会・講演会等の開催

1 研究会

本年度は下記の研究会を行なった。

日時 昭和四二年三月二七日

講師 Dr. Jerome Chien, Prof. James Chester Cheng, Prof. Chow Tse-Tsung, Mr. Winston Hsieh,

Prof. Din Cheuk Lau

議題 東アジア研究の現状

2 講習会

本年度はアラビア語講習会を開催した。

期間 昭和四一年七月一日～八月二七日(除日曜)午前九時～一二時

講師 内記良一氏、中野暁雄氏、アリー・アッザアビー氏、ムハムマド・S・アルケレディ氏

受講者 一五名

VI 便宜供与

センター事業活動に伴い来日外国人研究者に対する便宜供与は年々著しく増大した。その主なものは次の通りである。

Dr. I. Hubert Reynolds

Director, Cultural Research Center, Silliman University

Mr. John Davies

Student, Emmanuel College, Cambridge

姜 周 鎮

韓國國立國會圖書館

曹 永 和

Chief, Collection Keeping Division, National Taiwan University  
Library

Dr. Su Chung-Jen

(蘇 崇 仁)

Education Officer, Education Department, Hong Kong Sub-Office

Dr. Sutjipto Wirjosuparto

Professor of Archaeology and Cultural History, Faculty of Letters,  
University of Indonesia

Dr. Hong Ryoil Ryu

(曠 榮 烈)

President, Taegu College, Korea

Mr. Jagjit Singh Sidhu

Lecturer in History, Faculty of Arts, University of Malaya

Dr. Domingo Abella

Professor of History, College of Arts and Sciences, Ateneo de Manila  
University, the Philippines

Dr. K. G. Tregonning

Professor of History, Faculty of Arts, University of Singapore

Miss Titima Phitakspraiwan

Lecturer in History, Faculty of Arts, Chulalongkorn University,  
Thailand

Dr. Nguyen Khac-Kham

(阮 克 謙)

Director, the Directorate of National Archives and Libraries, Vietnam

Mr. N. A. Bamnate  
Chief, Section of Cultural Studies, Department of Cultural Activities,  
Unesco

Dr. Unto Imari Tahminen  
Lecturer in Moral Philosophy, University of Turku, Finland

Mr. Choi Seung-Bum  
Assistant Professor of Korean Literature, Chonpuk National University,  
Korea

Mr. Aapo Kustaa Niemi-Junkola  
Writer, Finland

Dr. Jerome Chien  
(張 怡 謙)  
School of History, University of Leeds

Prof. James Chester Cheng  
(鄭 哲 榮)  
San Francisco State College

Prof. Chow Tse-Tsung  
(周 策 縱)  
University of Wisconsin

Mr. Winston Hsieh  
Travelling Fellow of Harvard-Yenching Institute

Mr. Din Cheuk Lau  
(劉 鐵 鏗)  
Lecturer, School of Oriental and African Studies, University of London

Mr. Lü Shih-peng  
(呂 士 朋)  
Associate Professor of History, Tunghai University, Taiwan

Mr. Chen Chieh-Hsien  
(陳 捷 先)  
Associate Professor of History, National Taiwan University

Dr. Majumdar

Director, India International Centre, New Delhi

Prof. Aiders Burks

Rutgers University

Dr. J. Elaff

School of Oriental and African Studies, University of London

Prof. Somsakdi Xuto

Head, Department of Foreign Affairs and Diplomacy, Faculty of Political Science, Chulalongkorn University, Thailand

Prof. Lai Yung-Hsiang  
(賴永祥)

Head, Department of Library Science, National Taiwan University

張其昀

中華民國國防研究院副院長

Dr. Raul Estuardo Cornejo

Principal Professor and Director, Institute of Language and Literature, Faculty of Letters and Education, National University of Ica, Peru

Dr. Chen Cheng-Siang  
(陳正祥)

Director, Geographical Research Centre, Graduate School of the Chinese University of Hong Kong



附(二) 東洋學術協会

評議員 石田 幹之助 市古宙三 岩井大慧 岩生成一 梅原末治  
 榎 一雄 河野六郎 白鳥清 末松保和 辻直四郎  
 原田淑人 三上次男 山本達郎

編集担当者

宇都木 章 榎 一雄 神田信夫 北村甫 草野靖  
 佐々木 正哉 田中正俊 松村潤 護 雅夫 山口瑞鳳  
 山根 幸夫  
 幹 事 白川邦子

東洋學報第四十九卷第一号——四号内容目次  
 第四十九卷第一号(昭和四一年六月)

南宋行在会子の發展(上)……………草野 靖  
 切韻における蒸職韻と之韻の音価……………平山久雄  
 洪大全供出逆匪会匿名單二紙……………佐々木 正哉  
 松本雅明著 春秋戦国における尚書の展開……………友枝 竜太郎

劉世儒著 魏晉南北朝量子研究……………	坂井健一
広祿・李学智著 清太祖朝「老滿文原檔」与「滿文老檔」之比較研究……………	神田信夫
劉鳳翰著 袁世凱与戊戌政変……………	菊池貴晴
ペルシッツ著 極東共和国と中国……………	伊藤秀一
テイワリー編 カビール・グランターワリー……………	古沢宣子
第四十九卷第二号（昭和四一年九月）	
唐朝租庸調時代食封制の財政史的考察……………	日野開三郎
南宋行在会子の發展（下）……………	草野靖
ソヴィエト連邦科学アカデミアアジア諸民族研究所（レニングラード支所）における東洋学……………	護雅夫
比較社会構造論——アメリカから見たアジア史の把握方……………	市川健二郎
スキナー著 中国農村社会における市場社会構造……………	斯波義信
天海謙三郎著 中国土地文書の研究……………	村松祐次
スターン編 イスラム記録所の文書第一集……………	渡辺宏
第三回「若手アルタイ学中央アジア研究者集会」……………	岡田英弘
中国の歴史博物館(二)……………	菊池英夫

第四十九卷第三号（昭和四一年三月）

古代チベット史考異——吐蕃王朝との姻戚関係(上)——	山口瑞鳳
五斗米道の教法について(上)——老子想爾注を中心として——	大淵忍爾
マウリヤ王朝時代における仏教の伝播——第三結集・諸方教化両伝説の再検討——	山崎元一
キング編 晩清西文報紙導要……	佐々木正哉
ボーグ著 アメリカと極東の危機(一九三三〜三八年)……	明石陽至
三上・石川・芝共訳 抗日軍政大学の動態——関係資料の紹介をかねて——	藤田正典
シャーストリ著 インド史の史料——とくに南インド史の——	辛島昇
グハ著 ベンガルに対する所有権の支配——永代定租制の理念に関する一試論——	高島稔
第四十九卷第四号(昭和四二年三月)	
魏晋南朝の板授について……	越智重明
古代チベット史考異——吐蕃王朝と唐朝との姻戚関係(下)——	山口瑞鳳
五斗米道の教法について(下)——老子想爾注を中心として——	大淵忍爾
張家駒著 兩宋經濟重心的南移……	柳田節子
故ルイ・ルヌー博士(一八九六〜一九六六)主要著作目録(暫定)……	辻直四郎

昭和四十二年十二月二十一日印刷  
昭和四十二年十二月二十六日発行

〔非売品〕

財団法人東洋文庫年報

東京都文京区本駒込二丁目二八番二一號

發行者 榎 一 雄

東京都文京区白山二丁目十二番五號

印刷所 創 文 社

東京都文京区本駒込二丁目二八番二一號

電話 (942) 〇 一 二 一

發行所 財団法人 東 洋 文 庫

(振替東京六七〇三三番)

